

# 高炯烈『長詩 リトルボーイ』出版記念・交流会

## ◎第一部

開会の言葉…海老根勲

挨拶…福谷昭二、鈴木比佐雄

著者挨拶…高炯烈

鼎談…高炯烈、本多寿、佐川亜紀

(鼎談司会 鈴木比佐雄 通訳 徐錫姫、金令姫)

挨拶…米田勁草

閉会の言葉…御庄博実

松尾静明 それでは、原爆詩ということにとどまらず、日本と世界の表現の中に新しい一頁を刻む、高炯烈氏著日本語訳名『長詩 リトルボーイ』の出版記念会を行いたいと思います。皆様にはご遠方よりお忙しい中ありがとうございます。

ところで唐突でございますけど、ご出席の全員の皆様にお願いがございます。これから『長詩 リトルボーイ』の作者である高炯烈氏に対して、お祝いの意味で全員で大きな拍手をお願いしたいので、よろしくお願いします。(一同盛大な拍手)『長詩 リトルボーイ』ご出版、心よりお祝い申し上げます。ありがとうございました。ちょっと今順番が狂ってしまいました。(笑)拍手は高先生が起立された後でとのことでしたが(笑)拍手が先になったようで、ちょっと順番が狂いました。高先生、どうぞお座りください。

僭越でございますが、私が司会を仰せつかりました松尾静明と申します。よろしく申し上げます。(拍手)こちらは李美子(イ・ミジャ)さんと申されまして、本日の司会と併せて通訳をなさって下さる方です。非常に重要な役目を快く引き受けて下さり、ありがとうございました。

李美子 東京から参りましたイ・ミジャ、李美子と申します。私は七年前の九九年に第一詩集『遙かな土手』という詩集を出しました。私は在日二世ですが、在日一世が少しずつ年齢が高くなって亡くなっていく中で、そういう自分たちのオモニ、アボジ(母、父)の記憶を残したい、日本に残したいという思いでこの詩集を思い立ちました。ですからその中には多分、私の娘は在日三世ですけれども、この子たちが知らないお祖父ちゃんお祖母ちゃん、ハルモニ、ハラボジの日本での生活、大変だった思い、あるいは喜び、いろいろな経験などを是非伝えたい。それは日本の方にも是非読んでほしいという思いで書きました。そういう詩を書いている関係もあり今回皆様とお会いできるようになりまして、高炯烈先生の『リトルボーイ』もそうですけれども、在日韓国の原爆被爆者のことを長編叙事詩にして書いたもの、そういう何か因縁みたいなものが、この広島と皆さんと私たちを結びつけたのではないかと思うのです。そういう意味で、今日はほんとうに僭越なんです、韓国語も二世ですからあまりできないのですが、こうやって皆様の前でお話をさせていただいています。どうぞよろしくお願いします。(拍手)

松尾静明 それでは、開会のお言葉を頂きたいと思います。元中国新聞論説委員の海老根勲氏にお言葉を頂きます。海老根氏は、中国新聞記者時代から論説委員時代まで非常に長い期間にわたって広島県の文化全般に眼を配って頂いた方であり、とりわけ原爆問題には力を注いでこられて、

広島花幻忌の会という原民喜の業績を顕彰する会がございますが、その会の事務局長を務めて頂いております。よろしくお祈りします。(拍手)

海老根 勲 ご紹介を頂きました海老根でございます。本当は花幻忌の会の代表の安藤が開会の挨拶をすることになっていたらしいのですが、彼が来ていないものですから、「事務局のおまえがやれ」ということでこちらに来て言われたものですから、これは開会の挨拶というのはどういうふうにするのかわかりません。「これから始めます」で終わってしまうのでは申し訳ないので、何か一言しゃべらないといかんなあと思いつつ、一生懸命考えています。

私はこのたび初めて『長詩 リトルボーイ』という詩集を送られてきて拝見いたしました。まだ十数頁ぐらしか読んでなく申し訳ないのですが、昨夜から拾い読みをしました。日本とアメリカ、あるいは朝鮮半島 | | こういう形でまさにもの凄く長編叙事詩にまとめ上げられたその構成力、あるいは想像力、イマジネーション。そのもの凄さを発揮した高さんにまず敬意を表したいと思います。

いま広島では被爆体験の風化とかいろいろと言われています。「体験の風化」というのは、取りも直さず「記憶の風化」だろうと思います。それは、風化してゆく体験あるいは記憶をこのような形で紡ぎ直して次の世代に繋いでゆく、その言葉の力、文学の力というものに改めてまた敬意を表したい。今日はそこに並んでいます私たちの仲間である御庄博実さん。石川逸子さんと一緒に「在韓被爆者の大会報告」を八月六日付で出版されています。こんな形で、いろいろ所でいろいろな形でいろいろな言葉が紡ぎ合わされて、そして次の世代に繋いでいく。今やはり風化が叫ばれているからこそ、そういう一つひとつの作業が大切なのだらうと思います。その一つひとつの作業を繋ぎ合わせて、そしてこの広島、あるいは広島と朝鮮半島の、東アジアの、さまざまな歴史の負の問題、あるいはそれらを乗り越えていく共生の在り方 | | そういうものを次の世代と一緒に探つてゆく、そのよすがとしてまたこういう詩集の誕生を喜びたいし、これからもまたいろいろな場でいろいろな詩人が、文学者が、風化する記憶を言葉に紡ぎ直していつか記憶に留めていただきたい。そんなふうに思います。そういう様々な記憶の風化に抗してゆく文学の力みたいなものを今日またこうして皆さんと一緒に学べることを、私は非常に喜びとしています。こんなことで開会の挨拶になるのかどうか分かりませんが(笑)。それでは、詩集『リトルボーイ』出版記念会を皆さんと一緒に学び合いたいと思います。ありがとうございます。(一同拍手)

松尾 静明 ありがとうございます。ピンチヒッターにしては凄くことをやってくれました。(笑)さすがでございます。

続きまして、前広島県詩人協会会長福谷昭二氏よりご挨拶をいただきます。福谷昭二氏は、前広島県詩人協会会長という肩書きが示す通り広島県詩壇の発展に大きく寄与なさった方であります。また、教育の面で公立教育の校長のみならず民間福祉学校の校長さんをつとめられるなど、さらに文化の面では、町誌、郡誌の執筆を担当されるなど、人権教育や社会教育に精通されている方であります。それが評価されまして「勲四等瑞宝章」を受章されている詩人でもあります。よろしくお祈りします。

福谷 昭二 失礼いたします。大変詳細な、しかも過分な紹介をいただきまして、ちょっと恐縮しております。今日は私の立場は、広島での高畑烈さんの『長詩 リトルボーイ』、この詩集の出版記念会を東京のコールサック社、広島花幻忌の会、それから火皿詩話会、その中の火皿詩話会の代表として一言ご挨拶を申し上げるということでございます。本当に暑中、しかも広島では明日が記念日であります。そして様々な催しが今日から明日にかけては行われております。とりわけ広島の方は、そういう行事でいろいろお忙しい予定があったのではないかと思います。沢山おいでいただきましてありがとうございます。篤く御礼を申し上げます。

先ほど海老根さんから非常に的確な文学の果たす役割、言葉の果たす役割といったことについてのお話がありました。私は一言だけ、このたびの『リトルボーイ』の持つております意味と申しましょるか、それを私なりに把握していることをちょっとお話しさせていただきたいと思つています。

それは何かといいますと、この高畑烈さんの詩集は長編叙事詩であります。「長編叙事詩」。だから「叙事詩」というふうには私たちが一応私たちが理解していいのだらうと思つております。が、この叙事詩というのはまたこれ、「詩劇」「叙事詩」「叙情詩」と、詩の歴史の中では非常に大きなパートを占め

てきたものであります。そういう歴史の中で、私はこの『リトルボーイ』の持っている一つの大きな意味があると思います。普通、叙事詩というと、これは我が国の古典にもありますし、ギリシャ、ローマ、あるいはその他中世のヨーロッパ、そういったような所の様々な古典の中に叙事詩と言われる作品が沢山あります。ですが、そういう作品は、多くはある特定の英雄なり活躍した偉人なり、そういう人々の一生を叙事的に描いている。これが叙事詩の大きな概念です。しかし私は、高炯烈さんのこの詩集が出たことによって人類史上が持っております叙事詩の持つ意味というものを大きく変えて行くのではないかと理解をいたします。それは、この作品の中に出てまいります多くの人々ですね、それはほんとうにこの原爆という惨劇の中で生き、闘い、悶え、苦しみ、亡くなっていったそういう人たちの一人ひとりが描かれている。そしてそれが、大きな時代を描く叙事詩になっているわけですね。従来の私たちが言っている叙事詩とは非常に大きな変化が現れていると思ひまして、今後これが世界の文学の叙事詩のスタイルを変えていくものになっていくのではなからうかと思っております。そういう意味で、非常に大きな意味があるのではなからうかと思っております。

同時にもう一つ、私たち広島に住んでいる者から申しますと、今年の夏は、こういった東京でお出しになっている『リトルボーイ』もそうですし、我々「火皿」の仲間ですらいろいろと活躍しております今日も来ておられますが長津功三良さんのこれも八月六日の発行でございますが『影たちの墓碑銘』、この二つの詩集はアプローチの仕方は違いますけどやはり叙事詩の中に入ると思ひます。それからもう一つ八月六日の日付で、これは私たちがいろいろと取り組んでまいりましたが広島で、まあ私に言わせれば最も早く原爆の詩を書かれたと言って良いと思ひます。米田栄作さんという大先輩詩人の方がおられますが、その方の詩集もほぼ全詩集で八月五日に出版しています。そのように考えてみますと、今年の広島を詠った詩というものは、非常に大きな意味を持っているのではなからうかと思っております。叙事詩の新しい展開。さらにまた、米田さんのあの惨劇の中を掻い潜り子供を捜して歩かれた、その中で歌われた叙情、素晴らしいと思ひます。そういった様々な詩集が出ております。今年六十一年目です。六十年というある風化の時期とも言われますが、この時期に今後の展望を持たせてくれる素晴らしい詩集だなと思ひます。

この詩集をお出しになるにあたりまして、もちろん高炯烈さんもそうですが、日本語訳をされた韓成禮さん、あるいは日本での出版の労をとられたコールサック社の鈴木比佐雄さん、こういうお方の力があって『リトルボーイ』が出たのではなからうかと思っております。それぞれのところでご活躍なさいました皆さんの力にお礼なり敬意を表して挨拶に代えたいと思ひます。今日はどうもありがとうございました。よろしく願いいたします。(拍手)

松尾静明 それでは次に、高炯烈氏の『長詩 リトルボーイ』の出版を手がけられた鈴木比佐雄氏に出版の経緯について語って頂きたいと思ひます。鈴木比佐雄氏は人間の存在ということについて、「個人そのものの存在」と「個人の社会的存在」について常にその融合ということを考えてこられた詩人だと言えらると思ひます。ご自分の作品にそのことを投影するというのももちろんですが、そういった詩を書く詩人、また書いてきた詩人たちを発掘し、再評価することに力も注いでこられた方です。それが『浜田知章全詩集』、『鳴海英吉全詩集』そして今日の『長詩 リトルボーイ』ということであると想われます。よろしく願いいたします。

鈴木比佐雄 鈴木比佐雄と申します。暑い中を遠路はるばるお越し頂きまして、どうもありがとうございます。 「COAL SACK」(石炭袋)という個人誌を一九八七年に始めたんですが、その時に私は戦後の詩を考えて詩論を書きたいと思いました。また優れた宮沢賢治みたいな詩人を発見し、誌面に登場させたいなということを考えてやってきました。すると、私の父の世代の鳴海英吉や浜田知章という「列島」の詩人たちが見ていてくれ、支援してくれたんですよ。戦後詩の代表的な詩誌運動は「荒地」と「列島」ですが、そのうちの「列島」の詩人たちがなぜか集まってくれたんですね。私はその二人の詩人に出会い、公私共々ほんとうにお世話になったのですが、その二人の詩人で、例えば鳴海英吉さんは広島のこともちろん書いているのですが、鳴海さんといえば日蓮宗不受不施派の研究者でもあって、また『広島・碑文』という連作も書いているのですが、そうとう広島のこと調べて歴史的な広島軍都に対して加害者の側面を研究し、ある程度は書いたのですが、書ききれなかったということがあったと思うのです。浜田知章さんという詩人は戦後まもなく大阪で「山河」という私と同じような個人誌を始めて、それが同名の「山河」という同人誌に発展し大阪周辺で文学的な運動体になっていたのですが、そこで一九五二年に原爆特集をやりまして、浜田知章さんはオープンハイマーという原爆の父と言われているアメリカの科学者を追及した「太陽を射たもの」という詩を書いたのです。その特集に参加した長谷川龍生を含めた浜田さんたちは、原爆に対しての被害者意識だけではなくて、それを落とした人間たちを追及してゆくという強い意志を持った詩人たちでした。日本の加害者意識というのをちゃんと受け止める詩人、またはアメリカに対してちゃんと対峙してゆくような詩人、そういう二人の父のような詩人が私の周りにいたわけですね。そういう詩人にとっても影響を受けました。

「COAL SACK」は八七年からずっと続けてきましたが、私は九八年に浜田さんと一緒に広島に来たんです。先ほど紹介されました「火皿」の福谷昭二さん、御庄博実さん、長津功三良さんが浜田知章さんを選んでくれたので、私も同行しました。浜田さんが講演をした時に「広島哲学を世界に発信すべきだ」と言ったんですね。私はそれに非常に感銘を受けまして、「COAL SACK」もできればそのような「広島哲学」に関わっていきたくて常々考えていたのです。二〇〇一年に私が企画編集した『浜田知章全詩集』が刊行した時も、ありがたいことに広島詩人たちは浜田さんに敬意を表して出版記念会を開いてくれました。

九八年には韓成禮さんがちょうど東京に来られて、本多寿さんから紹介されて、韓成禮さんから韓国で一番活躍している現代の詩人達の話聞いたのです。その中に高炯烈さんがいまして、高炯烈さんの『リトルボーイ』の話聞いて、凄い関心を持って韓さんに詳しく聞いたんですね。この詩人に会ってみたい、『リトルボーイ』を読んでみたいと九八年に思いました。そうしたら一年後にまた本多さんの関係する集まりで高さんが来られて、紹介してもらったのです。私は高さんに質問攻めをしましてね。非常に共感を覚えまして、あ、この詩人は本物の詩人だな、と。そうか、韓国にも宮沢賢治みたいな詩人がいるんだな、と思いました。その場で『リトルボーイ』を「COAL SACK」に翻訳・掲載させてほしいと言い、そして「三、四年後には本にしましょう」と、そういうことを言ったんじゃないかと思えますね。それからずっと翻訳・掲載して、七年経ったのですがまだ半分ちょっとくらいで、これではいつになるのか目途がたたないと心配していました。しかし昨年からは聞いていましたが、今年の

初めぐらいに正式に韓さんから「高さんと二人で広島に行きたい」という話がありました。私は「その前にやるべきことがあります」と言い、私と本多寿さんが協力して原爆祈念日までに本作りをしますと提案しました。韓さんや高さんはとても喜んでくれて、韓さんも懸命に訳してくれ、日本側の訳文チェック、印刷・造本も迅速にすすみ、そして今日に至ったわけです。少し時間はかかったのですが、ほぼやるべきことはやっとな、そういうふうになっています。実は掲載中に「COAL SACK」で心ある皆さんが熱心に読んでくれて感想を頂いたりして手応えを感じていました。だんだんこれが一冊の詩集になったら大変なことになるんじゃないかな、と思うようになってきました。いろいろな方の協力を経て、こういうような本になったということは、私と高さんと韓さんを含めて本当に御礼を言いたいな、と感じています。内容に関してはこれからじっくり話させて頂くと思うのですが、一言だけ話しますと、昨日、高さんが広島空港に降り立ち、原爆ドームなどを見学した後、宮島に行き最後に岩国のホテルの近くのお好み焼き屋で、夕食代わりにお好み焼きを食べたんですね。そうしましたら、お好み焼きを作っているおじさんの姿を高さんがずっと見つめているわけです。なぜそんなに見つめているのかな、と思ひまして訊きますと、高さんは「あれは自分だ」って言うんですね、たくさん食材を重ねて一生懸命お好み焼きを作って、食べやすいように切って我々の所に持ってくる、その主人の姿を見て、ああ、自分もおんなじだ、と。いろいろな詩人たちから詩を集めたり、また自分も詩を作ったり編集したり、そういうものを読者に届けていると。そういう意味で、高さんのやられている詩の作品もそうですが、詩誌活動または編集者としての仕事を一言でおっしゃったんだなあと思いました。そういうような詩人を日本で紹介するということは凄く光栄なことなので、大変嬉しく思っています。(拍手)

松尾静明 ありがとうございます。それでは、いよいよ七千九百行の長編詩『リトルボーイ』の作者高炯烈氏、よろしく願います。高炯烈氏は一九五四年、全羅南道海南という所でお生まれですが、その略歴や詩的活動についてはお話の中で徐々に明らかにされてくると存じますので、ここでは控えさせていただきます。ただ、この場を借りて私が高炯烈氏を敬愛している理由を申し上げますと、高炯烈氏は「尊敬できる人が一人でもいれば希望が持てる」ということをおっしゃっておられます。「尊敬できる人間が一人でもいれば希望が持てる」——生きていくうえで哲学の一つとして、感動させられた言葉でございます。それでは高先生、よろしく願います。(会場拍手)

高炯烈 (以下、徐錫姫氏による同時通訳) 今日は何の話から始めようかと考えていますが、はっきりしていることは、「ここに自分がこうして居る」ということ。それから、自分がこれからまたソウルに帰ったら、「ここに居た」ということをはっきりと思い出すでしょう。叙事的に時間と死というものは忘れやすいというか、すぐ忘れてしまうものかも知れません。辞書の上の言葉ではなく、言葉というものの文学、記憶するということの文学——言葉も一つの文学であると思っております。

広島に招待されてソウルを出発する前に、ここに招待してくれた皆様のための言葉を用意しました。堂々として美しい言葉というのは、「一人静かに書く」というその中から生まれてくるのではないかと思います。ソウルでも私は友人たちと会い、談笑したり、時にはお酒を飲んだり、討論したりして別れました。その夜家に帰ってみると、月刊誌や詩誌が届いておりました。その中に、自分がちょうどお酒を飲んで一緒に過ごして別れた友人の名前が書いてありました。そこに見た名前というのは、自分が今お酒を飲んでふざけたりして話し合ったその別れた友人の名前ではなく、「実際に会ってお酒を飲んで別れた友人が実際の友人」という考えだけではなく、その雑誌に現れた名前、そしてその人の作品を見て本当にその人の姿が分かる、そういう友人のことが分かるのではないかと思います。ここに立ってこうして話している自分というものは本当の自分ではなくて、文学、自分の詩の中に、作品の中に現れた自分というものが本当の姿ではないかと思うこともあります。それが詩であり、詩の作品というものだけが実際に存在しているものではないかと私には思われることがあります。では、ここで私が書いてきた言葉を朗読いたします。

一九四五年八月六日朝に広島に来て

原爆の被爆者たちが暮らす慶尚北道の陝川(ハプチョン)という村を訪ねた人間が、私をこの地広島に来させました。それは十九年という長い時間がかかりました。

「広島」——この都市の名前を静かに読むと、心の奥から泣きたい気持ちが込み上げてきます。八月六日は人類が経験した恐怖と戦慄の日でした。アメリカが原爆を投下した空間は、このアジアのこの空でした。そしてこの広島の空は、私にとっても悲しく見えます。

正直に言って、この作品の背景が広島であり、またその犠牲者が日本人と韓国人であったことを考えますと、このテーマについて書くことは簡単なことではありませんでした。にもかかわらず私は、国家主義と民族主義を超えて原爆問題を書こうと努力しました。ということは、この『リトルボーイ』の創作の意図が「朝鮮」と「日本」ということではなく、「原爆—リトルボーイ」そのことでありました。既存の二分法的な考えを超えて、人類的な次元において原爆ドームを眺めようと考えました。被爆者に対する単純な同情の気持ちではなく、私たちが正しい考え方を持っている、そういう一つ高い段階で生命についての道徳性を堅持しようという、一つの象徴として眺めようと思っています。日本を敗戦に至らせたという単純な理論の原爆ということだけではなく、人類の良心に訴え、一人の詩人の性命——これは仏教用語で悟りを得るための一つの段階のことを言いますが、詩人としてのその性命を得たいと願いました。

私はただ一人の詩人にすぎません。私は限りなく小さな存在でしかありません。まさしく日常生活の用語であるような机の下の小さな虫の鳴き声、そのようなものです。こうして日本に来ていたら、この虫の気持ちという自覚が一つの固有なことではないかと考えられます。「韓国の被爆者の国」という性急な言葉の前に、まず日本の被爆犠牲者の靈魂に対して何か言わなくてはいけないのではないかと自分は思いました。そうして私は、一つの都市の市民の頭上に核を落とすという主体に対して考えるようになりました。そういうことを認識することのみが最も大事な考え、まず第一に必要なことだと思います。

悲しいことです、アメリカに対する私の偏見はこれからも変わらないと思います。考えが異なる民族に対して苦痛を与え殺害するとしたら、たとえその主体が国だとしても、私としては恐ろしさを感じずにはいられません。そういうことから私は、単純に世界を一つに統一しようという主張に対しては反対します。どうしてこの地球上にそのような考えを夢見ることができるでしょうか？　そして私が憎むことは、他人を自分と同じように考えてしまう、自己化してしまうという意図であります。そういう危険な主張は、主に政治の指導者たちが持つ考えです。自分の国に害を与える指導者は、はっきり言って正しいことをしている人たちではありません。私は私自身で生存しており、存在しており、存在したいと思っています。ですから、決して他者に対して自分のようになって欲しいとは言えません。固く一つに閉じ込めてしまう世界、それが「一つの世界」とは言えません。私が『リトルボーイ』の中の「序詩」と最後の詩の二つの作品の中で連想したのも、こういうことなのです。

私は昨日、広島の平和公園の中で大きな樹が青々と枝と緑の葉を伸ばしている姿を見まして、自分の描いた「生命力」というものを改めて発見しました。柴田三吉さんの作品の中にイラク戦争で腕を失った少女が登場します。少女の腕は爆弾で失われてしまいました。昨日見たように樹の枝はま

た新しく生き返って伸びますが、少女の腕はもう返ってきません。佐川亜紀さんの詩集に「返信」という詩があります。アメリカがイラクを侵攻した時に佐川詩人は、イラクでのアメリカの戦争に対して反戦運動を展開しました。彼女の文学的な使命、そしてその「返信」という作品は、この地球を信じて生まれてきた子供、その子供が泣いている、そのイメージを伝えています。この時間にも私の後ろで聞こえてくるのは、その爆音と泣き叫ぶ声であります。深夜サイレンの音を聞いているその小さな少女の姿、布団の中で震えている少女を、私は自分と結び合わせて考えます。どうすればそれを想像し、記憶し、文学化していくことができるだろうか？ 私は頭を振りながら、これから絶対に戦争を繰り返してはいけない、戦争してはいけないと何度も思うのです。六十一年前の朝、仕事に向かうその道の上に何が落ちていたか、そしてその道がどうふうに残っていたか——そういうことを記憶しなくてはなりません。今まで私は広島に来たことはありません。けれども、資料を探して想像しました。そして長篇詩『リトルボーイ』をまとめました。

私は、平和公園の中のドームを見ると絶望の中に陥ることがあります。詩人として人間に対する失望を痛切に感じております。私がこの広島から得て帰る宝物、それは戦争に対する恐怖心です。そしてその宿題、課題は「他者を苦しめる夢があるとしたら、それは反省しなくてはならない」ということです。そうした単純な論理が真理の一つではないかと思えます。そういう単純さに戻っていく忍耐強さがお互いに必要だと思えます。弁明するということを人はいつまでも繰り返します。それは結局は大きな嘘に繋がります。愛というのはとても単純なものではないかと思えます。東洋ではあまりにも複雑な計算した考えというよりも、愛というものを感じています。

私は昨日と今日広島に来まして、広島の方々のとても温かな歓迎を受けました。詩集を発行していただきました「COAL SACK」の発行人であります鈴木比佐雄さん、装幀を受け持っていただき、そして韓国に沢山の詩人を紹介していただいた本多寿さん、『リトルボーイ』の作品の背景を想像させていただいた長津功三良詩人、東京から来た佐川亜紀詩人、京都から来た真田かず子詩人、そして広島の沢山の詩人たちに心から感謝申し上げます。実は、私と一緒に日本に来る予定でありました『リトルボーイ』の日本語訳を担当して下さった韓成禮さんは腕の手術のために今日は来られなくなりましたが、そういう方にも心から挨拶をしたいと思えます。みなさん、どうもありがとうございます。(一同盛大な拍手)

#### 《鼎談》

松尾静明 それでは、鼎談に入らせていただきます。高炯烈氏、本多寿氏、佐川亜紀氏に、高炯烈氏の詩的活動と併せ『長詩 リトルボーイ』の内容などについて、話し合っていたきたいと思います。高炯烈氏は先ほどご紹介申し上げましたので、本多寿氏、佐川亜紀氏について一言ずつご紹介いたします。

本多寿氏は一九四七年宮崎生まれの方であります。第一回伊東静雄賞、第四十二回H氏賞を受賞された詩人です。佐川亜紀氏は一九五四年、東京生まれの方です。第二十五回小熊秀雄賞を受賞、そして森田進氏との編著『在日コリアン詩選集』によって第三十回地球賞を受賞された詩人です。なお、鼎談と質疑応答については鈴木比佐雄氏に司会を担当していただきますので、よろしくお願ひします。

鈴木比佐雄 司会と申しまして、私は鼎談の前に高さんについて多少触れさせていただければ思っております。後は三人で自由に語って頂きたいと思えます。

高さんは『長詩 リトルボーイ』を書かれましたので社会派詩人だと思われがちなのですが、高さんの略歴を読みますと、一九六二年から高さんは父親の蔵書でいろいろな本を読んでいたのですが、詩人・小説家の中では白石、鄭芝溶、金素月の三人の名を挙げて高さんは影響を受けたと語っているんですね。これらの詩人たちに対しては先ほど少し車の中でお聞きしたんですが、実は日本に留学されていて、朝鮮半島の中では裕福な家庭の出身で、日本の詩文学を勉強しながら朝鮮半島の詩を作り上げていった詩人たちなんですね。そういう詩人の作品を高さんは深く読んでいるのです。その詩人たちは日本の詩人たちに影響されて、日本の様々な場所や地名も詩に残しているらしいです。その意味で、実は高さんは日本の詩や詩人のことが間接的に分かっているということが言え

と思うのです。それは過去の日本に留学された詩人を通して、日本の詩人の求めていたものを受けとめていたのです。また高さんは詩の芸術性を大切にされていることがよく分かります。本多寿さんや佐川亜紀さんから紹介された日本の詩人も翻訳を通してしっかり読み込んでいて、その詩や詩人の価値を掴まえています。やはり詩的な発想や詩の言葉の美しさに惹かれている純粋な詩人なのです。そのような詩人でありながら編集者であり、アジアの詩人たちを紹介している詩誌の活動家であり、また小説や評論も書かれている、そういう多面的な面を持っておられるんですね。そのあたりを本人にお聞きし、本多さんと佐川さんにも語って頂きたいと思うのです。

本多さんが装幀をされた葉っぱの中の原爆ドーム、この葉っぱというのはですね、一番最後の詩の中に「草の葉」という詩があるのですが、そこからヒントを与えられたのだと思います。「遠く海に草の葉一枚が流れている。／あの草の葉の上に私たちを皆載せることができるか。」という詩行から始まっています。「あの草の葉の上に」という仏教的な精神といえますか、命を信じるというそういう高さんの精神性が籠められているのではないかと思うのですが、そういう意味での詩的な芸術精神を本多さんの方からいろいろお話して頂き、お聞きしてもらいたいと思います。高さんは二〇〇〇年からアジアの詩人を紹介したいということで、ソウルで『詩評』という詩誌を定期的に発行されていて、アジアのいろいろな国々の詩人たちを編集し紹介しています。日本からは本多さんと佐川さん、あとは柴田三吉さんも関わっています。そのようにアジアの詩人たちの協力を得てアジアの詩人を発信していくような詩の雑誌、詩の運動の話を佐川さんからも詳しくお話して頂き、またお聞きしてほしいと思います。それではよろしく願いいたします。

本多寿 どうも皆さん、こんにちは。広島に直接来る飛行機に乗ってくれば一番良いのですが、それに乗ると開会に間に合わない、夕方の飲み会にだけ間に合うという時間帯で、福岡経由で、新幹線に乗ってきました。八月のこの暑さを考えただけでも、原爆が落ちたその朝のことを含めて、いろいろ記憶力を掻き立ててゆかねばと思います。

高炯烈さんとの『リトルボーイ』を出すまでの概略を、どういう出会いがあって、今こうして座っておられるかということ、分かるように簡単な紹介をしたいと思います。

一九九五年、日本の敗戦後五十年、韓国は日本植民地政策から解放されて五十年の節目に、戦後生まれの韓国と日本の詩人たち五十人余りが、詩作品を、お互いの国の言葉に翻訳して出版するという企画がありました。つまり、一九四五年の八月以降に生まれた戦争を知らない世代の人たちが、いろいろなしがらみを越えて交流しようじゃないかということで、韓国で出版記念会を行いました。その時は、まだ韓国の詩人と初めてお会いするわけです。沢山の詩人が出席していて、特定の詩人との出会いはないのですが、そのうちに、今度、翻訳を担当された韓成禮さん、この方がそのアンソロジーにも協力されて、両国の言葉を翻訳され、志を持って、いろいろな歴史的なわだかまりを越えて、戦後生まれの詩人たちの新しい関係を築く糸口を作ってくれた方です。その時に高炯烈さんもお見かけしました。その韓国訪問の時、佐川亜紀さんと、なぜかツーショットで写真を撮った記憶があります。(笑)

愛媛からも今日、堀内統義さんも来ていますが、彼も一緒に会合に参加しました。僕は九州に住んでいますが、東京とか広島から韓国に行く、また、それぞれの地に来るということもあんまり変わらないんじゃないかっていう位置関係にあるんです。私は九州ですので韓国の隣という感じでおります。それ以後、近い関係なのでよく行くようになりまして、それは、なぜ行くようになりましたかという、初めて伺った一九九五年の八月十五日の二、三日前だったと思うのですが、行った時に、暑い時期だったのですが、夜、風邪の具合が悪くなりました。言葉が通じないのですが、親切に介助してくれて、とても懐かしい、見失いかけていた故郷の人間関係と言いますか、そういう温かみを感じたのです。それで、ふたたび行ってみようと思ったのです。ただ、言葉ができませんので韓成禮さんを頼りにしまして、九六年に行って、次の九七年の二月だったと思うのですが、高炯烈さんに仁寺洞(インサンド)で紹介されたのです。仁寺洞の街は、ぼくの大好きな街で、ぼくの故郷と同じくらい好きなのですが、そこで初めて会って話したのです。その後、九八年に、先ほど鈴木さんがおっしゃったのですが、僕の同郷の後輩なのですが、狛江の韓国語同好会で韓国語を学んでいて、その韓国語同好会の記念行事に、誰か韓国の詩人を紹介して欲しいと頼まれて、それで韓成禮さんと呼んだ時に鈴木比佐雄さんを紹介したのです。

韓成禮さんが来た時には柴田三吉さんと会談をしているのです。その次の年には高炯烈さんが来たのですが、その時に鈴木比佐雄さんを高炯烈さんに紹介したんですね。前年に『リトルボーイ』を出版されたことを知っていますからね。そうしたら、彼は高炯烈さんを独占するようにして他の人が話す暇がないくらいに。(笑)僕が注意したのね、あなた一人占めて他の人は話す暇がないよ、と。(笑)そのくらい鈴木さんは高炯烈さんの世界と、彼の人柄に惚れ込んだのです。その関係で『リトルボーイ』の「COAL SACK」への連載が始まったのです。

それから、いろいろな時間を経て方向を位置づけしたんですね。二〇〇六年には出版するというこ  
とで、高炯烈さんの詩集が出たのが十二年前ですから、日本語になるのに七年近く経っているとい  
うことは、とても翻訳者が協力してくれた、努力してくれたということです。

日本に翻訳されている韓国の詩の殆どは韓成禮さんの訳です。そういう翻訳者、韓成禮さんの、  
人間を結びつける努力にも日本の詩人たちはお世話になっているのです。

そういう流れの中で『詩評』というアジアの詩のネットワークを作ってゆくんですね。そのネットワ  
ークを作るのが一九九九年に日本に来た時に着想を得たと聞いていますけど、実際に『詩評』という雑  
誌が始まるのは二〇〇〇年ですが、その時に日本詩人のネットワークの委員として佐川さんと私が  
協力するようになったのです。今は柴田さんが協力してくれています。そのネットワークにはアジアの  
中国、台湾、ベトナム、韓国、日本と、それに今はモンゴルの方も関わっています。そういう形でアジ  
アの詩人たちのネットワークを作る気持ちの中には、それぞれの思想・信条とかを超えた考えがあっ  
て始めたと思うのです。

そのいきさつを高ささんにもお話して頂けたらと思います。それと併せて、僕たちは今、韓国と日本  
の詩人たちの交流はいったい何だということがよく見えるようになったんですけど、台湾だとか中国、  
ベトナムの詩人たちの『詩評』を通じて紹介された方たちの動向といいますか動きといいますか、今、  
どういった詩の方向が語られているかということ、そういうことをね、かいつまんで話して頂けるとあ  
りがたいと思います。よろしく願いいたします。

高炯烈 いろいろなことを尋ねられていると思いますが、何から話せば良いのかよく分からないの  
で、私のことについておっしゃっていただいたので、そのことについて先ずお話ししたいと思います。

笑い話なのですが、戦後に生まれた詩人たちが集まってどうにか作品集を出してみようじゃないか  
という話になりました。いま本多さんがおっしゃったように、「ただ会いましょう」ということ、「ただ」とい  
うことを韓国語で「クニヤン」と言います。日本語にそういう言葉があるかどうかは分かりません。「ク  
ニヤン」というのは、直訳しますと「ただ会いましょう」という「ただ」になります。私も説明しようとすると  
どう言えば良いのか分かりませんが、何の意味もない助詞のような意味もある。ですから、意味のな  
い言葉として使われている時があるのです。日本語で言えば「何の意味もない」、「何も意味を表さな  
い」、「無為」。無い為にある言葉です。(笑)他に言えば「何の目標も持たない」ということなのです。

今から言う言葉はおかしいのですが、「広島に来た」ということを先ほども言ったように記憶しなくて  
はいけないのですが、目的性というのはある意味では危険性もあり得ます。特に芸術、その中でも言  
語の極致といえる詩人たちにとってはそう言えるかも知れません。あまりはっきりとした目的を持たな  
いで、自然体である時に、そういう時にこそ自分たちが目的としたことが達成できるかも知れません。  
私は詩を書く時に「作る」ということを嫌います。韓国とか日本の詩を鑑賞する時でも「自然に受け止  
める」ということが重要ではないかと思えます。詩人が一生涯詩を書くということ自体、これは目的性  
があり過ぎます。思想はもっとそうです。私は自然体で生きたいです。詩を書くということに対して拘  
束されるのではなく、自然体で詩を書ければいいと思います。でも、私は拘束されています。韓国と  
いうのは、私は時々思うのですが、わが国はおかしい。混乱して、また精神的にちょっとおかしくなる  
時があります。でも私はソウルで生活しています。自動車の排気ガス、千三百万人の喧騒——でも  
その中で私は静かに生きたいです。

ある修道士の方がこんなことをおっしゃいました。「この世がどんなにうるさくて騒がしくても、詩人  
までもうるさく騒ぐことはない」。この社会が汚くいろいろなことがあったとしても、周りがどんなに騒が  
しくても、私はどこかで静かに、ほんとうに虫の音のように静かに存在したいと思えます。それが私の  
創作方針であり、私の生きる意味であります。

中国に白雲というお坊さんがいました。若い時にそのお坊さんは非常に知的であまりにもずば抜  
けているので、他の人はついて行けなかったそうです。そのために傲慢になりました。それで、白雲  
のお師匠さんが法華経を読みなさいと本をくれたのです。文学をする人は必ずこれを読まなければ  
いけないといいますが、目的を持って世界を行くということ自体はどんなに危ないことか、危険だとい  
うことが分かるそうです。事実自分がここを目的だとして行くとすると、他の道はみんな死んでしま  
うからです。私がこの道を行くとなると他のことがはっきりと見えなくなるし、聞こえなくなるのです。だか

らこそ私はここにいま来ていることはことは「クニヤン」、先ほど言いました「ただ」というその言葉が必要なのかも知れません。その中国の白雲というお坊さんが四十代になりました。唐の時代の人間ですから、四十を過ぎたらもう老人になりますね。今、韓国でも七十五歳を過ぎててもまだ青春だと言います(笑)。「九十を過ぎたら老人です」と言われるくらいです。(笑)その四十代になった白雲が、ある日自分の所で何も考えずにただ座っていたのです。「ただ」——先ほどから何回も使っていますが「クニヤン」、ただ座っていたのです。そうしたら、外から何か声が聞こえてきました。中国は自分たちの中心だと思っていたのです。「唐」というと、その中でも中心でした。その中でも国家のお坊さんですから、その中でもまたその上だと。自分が中心の中心だと思っていたのです。四十代半ばのその坊さんにとっては、世界では自分が一番ですから、自分は世界で何でも知っている。なのに、その時に何か小さな音が聴こえてきたんですね。「自分を見つけた」というのは幻覚に過ぎないのではないかと私たちは思うのですけれども、私もどういうふうに伝えれば良いのか分からないのですが、あまりにも美しい秋の陽の前にその小さな鳴き声の正体は何なのか？ また存在するのか？ 仏教で言うならばそういうことを考えるのは一番低い認識だと言いますが、そういう時にそこで自分自身というものが「ある」か「ない」かというのが現れるのです。例えば夢を見たとか、眠くて眠くてしょうがない時に寝てしまったとか、友達と一緒に談笑している時にあっちの方で全然知らない男が欠伸をしていたとか、そういう瞬間に自分が白雲というお坊さんになったような気がする。その時白雲はその声を聴いて、自分の部屋から出てその声を追って行ったのです。ですが、その鳴き声の「実際」というものは見えなかったのです。その秋の静けさの中で草むらを見たら、一つの石の下にコオロギが一匹いたのだそうです。その白雲が書いた詩があります。

〈おまえの着ているその青い服一枚 寒くないかい？〉

中国の秋といっても本当は寒い時期なのですが、白雲というその坊さんは小さな小さな存在のコオロギの鳴き声を聴いて、昔の師匠の言葉を思い出した——自分を低く見て礼節を尽くす。そのコオロギがいる地べたのように自分の気持ちを低くして、結局、お師匠さんが読めと言った法華経の代わりに自分はコオロギを法華経にしたという言い伝えがあります。今の話が一番目の話で、次にまた行きたいと思います。

韓国の文学はもう百年ぐらい経ちます。日本は「現代文学」と言いますと何年ぐらい経ちますか？  
本多寿 百二十～百三十年だと思いますが…。

高炯烈 韓国より日本の方が多分早いと思います。一九二〇年代に平壤にいる学生たちが日本に留学しました。その中に金東仁(キムドンイン)、朱耀翰(チュヨハン)という人がいました。朱耀翰は、わが国では自由詩を初めて書いた人だと言われています。金東仁は、平壤のその時代の富豪の息子だったということです。その時代は日本の植民地でしたから、日本に来て学ばなければいけませんでした。ですけど、この若い学生たちはほんとうにしつこかったんですね。「しつこかった」というのはどういう意味かと言いますと、植民地の時代に朝鮮の学生が日本で学ぶということは、そうたやすいことではないのです。お金があるか、後ろ盾があるかということです。ただ、そういう時代でも学生たちはほんとうに気軽に生活をしていたのです。「気軽」ということは何かというと、自分のやりたいこと、学びたいことをしながら十分に堂々と生活していました。昔からよく言うのですが、裕福な家の息子が革命とか自分の国のためにとか、そういうことをするのは少し難しい問題ですね。——いや、今の言葉はちょっと直さなくてはいけません。革命家の中には、それでも裕福な家の人がする場合もありますから。何かを学んで分かなければ革命家にはなれませんから、ちょっとおかしいですね。「カップ」というのは植民地時代の朝鮮文学史の中の一グループ名ですが、韓国文学の詩人たちとか小説家たちも、もちろん日本のいろいろな影響を受けたことは確かです。金東仁という人は凄く背が低くて体も小さく、女の子のような人でした。ただ何も考えないで日本で勉強していましたが、ある日、金東仁の先輩の朱耀翰が彼の部屋に行ったそうです。歴史的に重要なことが起きるというのは、その時は自然に起きるものだと思います。これを作るのも別に大した問題ではない、何か大きなことではないんです。こういう大したことではないことも、偶然に起きたのです。とにかく金東仁の部屋に朱耀翰が来たんです。それで、何気なく「何かをしようじゃないか」と。朱耀翰は若干野望があったんです。金東仁の方は「先輩、自分たちで何かやらなければいけないんじゃないですか？ 何かイライラしないか？ 何かやりましょうよ」とひとこと言ったそうです。朱耀翰はその言葉を待っていたのです。金東仁がそういうことを言うのではないかと。「それなら、文学誌でも作ってみようじゃないか」と言ったら、金東仁は喜びました。意見は朱耀翰が出しましたが、結局お金ですね、お金は金東仁に出させたんです。それで最初に創られたのが『創造』という同人誌です。韓国の現代文学ではそれが出発点になります。しかし、内部に問題が発生します。金東仁、何か計算高かったこの朱耀翰、一緒に力を合わせて本は出たのですが、金東仁は体も小さいですし弱いのでただ部屋に入って創作にだけ専念します。何ともない単語一つのことに対して二人は喧嘩したり争ったりしました。朱耀翰は民族的な政治的な夢を持っていたんです。中国に朱耀翰は見つけました。ここから二人は別れ始めました。結論的に言いますと、金東仁が勝利したんですね。弱かった者が勝ったのではないかと思います。ですから、先ほどの白雲というお坊さんが法華経を皆読んだお坊さんよりもその小さい小さいコオロギの声を聴けたというのと同じで、この金東仁の方が勝った。

そういうふうな形で、先ほどの金東仁と朱耀翰の関係で韓国の現代文学が始まりました。一九四五年に解放を迎えました。解放後、日本と韓国は遠くなりました。国民的な感情が発生しながら意図的に遠くなりました。それが韓国の文壇の内部にも現れました。その後一九五〇年に朝鮮戦争が勃

発します。その時に文学的・思想的な混乱が生じました。日本も敗戦の時にいろいろな問題があったと思いますが、朝鮮半島も一九五〇年の戦争でほんとうに致命的でいろいろな混乱が起きました。四十年もそこで生活したのに、解放して五年後に戦争が起きたので、一つの国の未来がほんとうに真っ暗になりました。その時、若干の文学者たちを支えたのが実存主義です。それで意識の分裂が始まります。その時に出てきたのが「難解詩」です。解読できない、解釈ができない、という詩が出てきました。ある一定の時期それがすごく流行って、「詩は分からないものが詩であり、伝わるのが重要ではなく、分からないのが詩である」というのが流行った。「あなたが書いた詩なのに、これはどういう意味ですか？」と訊いても、「私もよく分かりませんよ」。そういうのが返ってきました。でも、弁明することもあります。詩は、自分たちの知っていることだけを書くものではないから、そういうことも言えないわけではないのですが、最も低い意識のこと、例えば欠伸のような、電車に乗った時に私たちが六人であっちに一人女の子が座っていたとします。その女の人は何を考えているか分かりますか？——そのように私たちは人間を判断する、理解するというのは難しい。ですから、そういう無意識的なもの、何かモゴモゴ言ったようになって、そういうことが詩になるということもあり得るのではないですか？女の人が何かがあってとにかくイライラしたりとかわめき散らしたりとか、山に登ってわめいたりすることも、それもその人の何かのメッセージがある場合もあります。それは深刻な問題かも知れませんが。その日の、その八月六日の午後三時の太陽の中に、熱いものを感じることはありませんか？とにかく難解詩というものもその中で作られるものではないかというのがありますが、その時代の難解詩が流行ったそれ自体は否定できないと思います。その時代は結局、社会自体が、また詩人たちが病んでいたと言えるでしょう。それを治療する方法の一つは、私は間違っていると思うのですが、その時は経済的な自立が必要ではないかと言われていました。そして、それこそが難解詩から脱皮できる一つの方法ではないかと言われていました。それもまた「クニヤン」、先ほどの「ただ」というふうに言うのではないのでしょうか。そんな或る時間が来るということ。また特に複雑なことは、戦争が終わって十年過ぎた六〇年代初め、韓国は戦争が三年ありましたからその七年後に朴正熙大統領は軍事クーデターを起こしました。ここはちょっと重要なことになりますね、結果的にその歴史を見なければいけませんので。歴史を実存的に見るか、現代的に見るか、どっちも欠陥があります。韓国の人の中では朴大統領を「独裁者」とはあまり言いたくありません。もう一つは、現在主義は、いろんなところで民主化が起きたので、六〇年代のそういう時期を無視して朴正熙大統領だけを悪いと攻撃します。それも問題がある。実存主義の方は、「あの時代はああだったから仕方ないではないか」「朴正熙がいなかったらこうだから、ああだから」と言って朴正熙をまた肯定する。これも問題がある。この過程を見て、朴大統領が政権を握って十何年間経済的にいろいろなことをしまして、独裁政権を強化します。この部分をどうして社会的な問題として言えるのかといいますと、政治的な夢を持っているんですね、大衆と。表現の自由のために闘ってきた文人たち || 金芝河などの詩人たち、その社会の抵抗主義者ですね、抵抗主義の詩人と政治家たちのいろいろな衝突がありました。人生の中で、私たち個人のいろいろな矛盾があると思います。どういう時でも現在の要求を重視する時があると思います。そういうような時に金芝河氏は投獄されます。投獄されながら韓国の詩人の中でも身体を以て自分の表現をするというところに至ります。

そうした中で七〇年代、八〇年代が過ぎて行きました。八七年に韓国では大転換が起きるんですね。何かと言いますとその時に、今までは軍事政権でしたので、この八七年に「血一滴流さずに政権が変わった」と言われていますけれども、実際には八七年にも労働者たちが死んだり、詩人たちが捕まったり、いろいろ問題が起きていました。私もその中でそういう先輩詩人たちの影響を受けました。初めての詩集『大青峯すいか畑』を出した時に韓国の治安本部に捕まりました。そういう時代、友達や私のような若い詩人にとって監獄に囚われるということは当たり前のことと思っていました。それで、本当に多くの詩人たちが監獄に囚われました。本当に行きたかった私は監獄には行けませんでした(笑)。囚われて一応調べられるのですが、拘束の時間が決まっていますので時間が経つと許されます。拘束された時に寝ないで書いたものが沢山あります。その時の心境を書きました。

朴大統領がどのように暗殺されたのかはご存知のとおりですけれども、その後も同じような全斗煥大統領が出ます。それで韓国の民主化がまた遅れます。朴大統領でも憎たらしいのに、国民という

のは海で、その海の上に全大統領は船を一隻送るんですね。その船を見たくないのに、特に大学生たち、知識のある学生にとってはほんとに自分たちには自尊心がありますから、その政権交代を思う韓国の中の複雑さですね。ですから、その大学生たちが自尊心をもって社会を見ますから、ほんとうにそういう子たち、どうい子たちかと言いますと、韓国では田舎の方のお父さんが「子供に学ばせるために、自分の家の牛を売ってでも」というふうな子なのですが、そういう子たちほど結局いろいろなものを学びますから、そういう子たちほど監獄に囚われていきました。

韓国の社会はほんとうにあまりにもいろいろな変化がありました。これでこのまま行ったらこの国はどうなるのかと思いましたが、先ほども言ったように、私の考えではほんとうに面白いというか、興味深い国だと思いました。なぜかと言いますと、それでもちゃんとこうやって生きていますし、ほんとうに不思議です(笑)。それで私は友達同士でちょっと話してみたのですが、お互いに何で俺たちはこうなのだろうと。いろいろな理由があるのですが、まあ私が思うには民族性なのですが、韓国人の心の中では「この場所をどうにか壊す」という、そういうのがあるのではないかと。(笑)これは悪い言葉ではなく、中国の古代史の中に「朝鮮人は道端にいる時はゆっくり歩くのではなく、何か飛んだり跳ねたりする」というのがあります。何かにかこつけて一年の三百六十日さえも何か遊ぼうとする。「～の祝日」とか「何かの日」とか、そういうのがあるのではないかと。そういうことだったらお金も要りませぬね？(笑)どうやってそうして過ごして来たのか分かりませぬけれども、笑い話ですけれど。しかしながら、労働者の三十年間の搾取というのは本当に大変なことでした。ヨーロッパでは韓国の労働者たちは本当に強いんですね。韓国国内もそういうことは言います。労働者は非常に強い。

話は飛びますが、六〇年代に入りまして日本との関係が少し遠ざかりますので、六〇年代の後半になりますとヨーロッパからの文学を吸収します。それで、ヨーロッパの方に留学をいっぱいするようになりました。そういう中でヨーロッパの文学も入って来まして、いろいろな影響が及びました。

韓国の歴史についてずっと話してきましたが、先ほども言いましたように、日本と韓国の間が結局遠ざかりましたね。それでいて一九九九年に狛江市の「韓国語同好会」の方々と一緒に初めて会いまして、そのときに驚いたことは、お互いに詩人として文学者として本当に考え方も一緒なんですね。今まで何の交流も無かったにもかかわらず、考え方が殆ど一緒です。お互いに文学を知らなくてもいいんじゃないとか、韓国の方にも日本の文学を受け入れませんでしたし、そういうこととしてきたのに、なぜか殆ど感覚が一緒なのです。ですから、韓成禮さんと本多さんのような戦後生まれで戦争を知らない詩人たちが集まるということは、本当に意義があるのではないかと思います。時代が過ぎまして、いろいろなしがらみのない世代の人間が集まってこのように交流を持つことが必要な時代になったのではないかと思います。これからも交流を深めたいと思います。

佐川亜紀 大変面白いお話なので、私が話しをするのも余計ですけども、今お話しされたように韓国でもわりと仏教が詩の主題になるんですね。一九七〇年生まれの人文泰俊(ムン・テジュン)という若い詩人がいるんですけど、その方が『仏教放送』のラジオプロデューサーでいらして、書いているものも仏教の影響があるんですね。貝殻から足が出ますね、あれは釈迦が亡くなった時にあんまり弟子が泣くので、棺の外に足をちょっと垂らして弟子を慰めた姿に似ているというような面白い詩を書いて今期待されています。まだ三十五、六歳ぐらいでしょうか。今年の『詩学』七・八月合併号に韓成禮さんが文泰俊の作品を訳されています。東洋的な考え方をずいぶん高先生もおっしゃって、日本では、今、アメリカの合理主義が浸透してきているのですが、韓国の詩を読んでいますと、やはり東洋思想、仏教とか荘子とか老子、高先生も一九七九年に「現代文学」に初めて発表された詩が「荘子」という作品でしたが、そういう東洋的な思想も大事に守っていらつしやるところが私たちが学ばなければいけないんじゃないかと思います。それからちょっと宣伝なんですけども、先ほど、朝鮮近代詩の最初の口語自由詩を書いた朱耀翰について出てきましたけども、『在日コリアン詩選集』という詩選集を編集させて頂きまして李美子さんの作品も入っていますが、それは一九一六年から二〇〇四年までの作品集で、その中に朱耀翰が初期に日本語で書いた詩も収めています。でも忘れてはならないのは朱耀翰は日帝ファシズム期に「手に手を」という翼賛詩集を四三年に出版し、かなりの親日作品を残していることです。朱耀翰は能力がある詩人なので日本語がうまいんですね。日本語が巧かったが故に親日の協力詩を書かされたと言いますか、書いてしまったわけですよ。それで解放後かなり韓国で批判されたと思います。解放後、詩の世界から遠ざかってしまい実業界で重鎮になって、国の経済部門の常任委員としても尽力しました。朱耀翰は先ほど野心家だという面白い話がありましたけど、朱耀翰の事情を見ると、日本の侵略ということが最後まで詩人として生きられなかった一つの原因だと思います。私は朱耀翰について興味があってもう少し調べたいのですが、心痛むところがあります。すばらしい朝鮮詩人を途中で挫折させてしまったということで。

それともう一つ言わせて頂きますと、高先生はずっと「創作と批評」という有名な韓国の雑誌の編集もされていて、「創作と批評」というのは韓国では独裁政権と闘ってきて、先ほど出た全斗煥(チョンドファン)政権下に発禁処分になっているんですね。つまりそれぐらいある意味で詩が抵抗の力があつたということの証明にもなるのです。「創作と批評」の発禁処分にもかかわらずその時に抵抗詩人たちが出した詩集というのがベストセラーになって読まれたりしたわけです。高先生が今おっしゃられた最近の動きといえば、朴正熙(パクチョンヒ)大統領に対しても独裁政権というだけじゃなくて多面的に見よう、色々な経済的な面からも捉えようという動きも現れています。一方で、金大中事件の詳細が明らかになったり、両面から拮抗し合って韓国現代史が見直されています。

それから『詩評』というのは先生がずっと韓国で出されているちょっと日本では考えられないようなハードカバーの雑誌です。高先生と同じく一九五〇年代生まれの中堅詩人たちが委員となって意欲的です。ここには中国のシューティング(一九五二年生まれ)という方が載っていて、中国が文革や天安門事件など弾圧が激しかった時に最後まで中国に残って、モダニズムなんですけど、抵抗の詩を書いた女性詩人で、中国では敬愛されています。北島(ペイタオ、一九四九年生まれ)も載っているのですが、彼も中国のモダニズム詩人でやはり抵抗詩を書いたんですけど、その方は亡命しました。

画期的なのは「朝鮮日報」にも紹介されましたけれども、この中に林和(イムファ)というさきほど出ました朝鮮プロレタリア詩運動で「カップ」の委員長だった詩人についての文章があることです。林和は北に渡ったんですね、朝鮮戦争の時に。最後に北で米帝のスパイとして肅清されました。林和についてはタブーが多くて、韓国の現代詩というのは、北に行った、連れ去られた事例も多いのですが、それらの詩人についての言論統制が長くあり、鄭芝溶(チョンジョン)という有名な詩人も復活したのが一九八八年の民主化以降なのです。ですから、「朝鮮日報」の「詩評」創刊号紹介記事にも映画活動を通じた林和の文章が載ったことが興味深いと書かれています。高先生は非常に優しく自然体で、他のものを殺さないように自然体でやりましょとおっしゃっていますけども、この『詩評』の内容を見ますと色々な歴史が隠されているのではないかと思います。ベトナムの「音楽」という詩を書いている詩人・ウンウィエン・カン・テイエウ(一九五七年生まれ)はアメリカで出版して一九九八年アメリカ国立翻訳協会賞も受けています。ですからアメリカを高先生は嫌いだって言いましたけども、確かに最近とみにアメリカは問題が多くなっていますが、ベトナム戦争に対する反戦運動をやったアメリカの詩人もいて、ベトナムの詩人などを評価する面もアメリカにはあるということも蛇足ですが、付け加えさせていただきます。高先生は自然体で優しく優しくあるような(笑)お話をされましたけれど、やっていらっしゃる内容はアジア文学の過去と未来にわたる歴史的に大事なことだと私は思っております。補足になりましたけど……。

鈴木比佐雄 佐川さん、もっと最後までしゃべりますか？

佐川亜紀 いえ、いいですいいです、何か質問でもありましたら……。

本多寿 そうですね、せっかくですから質問とか訊きたいことがあったら……。このあとは総司会にまわします。(笑)

鈴木比佐雄 あと五、六分しかありませんが、何か高さんにご質問されたい方がおられましたらどうぞ。

では高さん、広島に來られた印象を一言お話しいただきたいと思います。

高炯烈 もっと沢山話したいことがあるのですけれども、あまり多くのことを語り過ぎますと時間が無くなってしまいます。中国のシューティング詩人、台湾のイェン・アイリン詩人、一人でも同人雑誌を出しています。またモンゴルの詩人ゲ・アヨルザン、静かな詩を書く人なのですけれども、俳句、短歌の影響を受けたそうですが、この方は俳句も翻訳しています。モンゴルの詩はそういうのがあるのですけれども。そんな詩人たちを基本的に四回、五回、十回以上読むのですが。そんな詩書を出しながら私の目標は、詩を書くことです。詩を書かなければいけないことです。鈴木さんは「COAL SACK」を作っているんですが、ふつう詩集というのは、特に詩の本を続けることはとても大変なことなんです。そういう意味で、仲間がいなければ、そういう人たちがいなければ続けていくのはほんとうに大変なことなのです。私もそういう意味ではアジア的な朋友意識というものを持っていますし、「COAL SACK」も鈴木さんが自分自身で書いていながら、遠くにいながらも近くにいるように感じて、耳と目となって多くの皆様が手伝ってくれる。私も一生懸命「COAL SACK」と朋友意識を持ちたいと思います。

ほんとうに長い時間をかけてお話してしまいました。私にとって感慨深い会を開いて下さり本当にありがとうございました。(一同拍手)

鈴木比佐雄 それから高さんには二つ提案をしたいのです。一つは『リトルボーイ』の第二部を書いて欲しいと。やはり相当なエネルギーが必要だと思うので、これはご本人が考えられてじっくりこれからやるしかないかなと思います。すぐに書いていただけなくとも、自然にこれからエネルギーが向かってゆけばいいなと思っております。もう一つは、「COAL SACK」に書いてくださいとお話ししましたら、『リトルボーイ』の連載が終わったあと、訪れたアジアの国々の詩篇をこれから書いてくれることですので、心待ちにしています。皆さんも高さんのアジア詩篇を楽しみにしててください。本日はありがとうございました。

松尾静明 質疑応答をする時間がございませんので、質疑応答は中止させていただきます。それでは閉会に際しまして御庄博実氏よりお言葉を頂きますが、その前に長津功三良氏より、ぜひともというお話がございますので、ちょっとお時間を頂きたいと思っております。

長津功三良 二部で司会を担当しておりますので今語るのはちょっと恐縮なのですが、広島で八月の上旬というのは非常に行事が重なってしまっていて、この一部でお帰りになる方がずいぶんいらっしゃるんですね。もう既に一部の方はやむを得ずお帰りになっています。ですから、まず二部に出られないでご遠方からいらっしゃった方をお名前だけでもご紹介しておきたいのが一つです。それと今日は八月五日、先ほど福谷さんがご紹介された広島の先達詩人・原爆詩人なのですが、米田栄作さんの命日なのです。先ほど福谷さんは八月六日とおっしゃいましたが、発行日は八月の命日の五日にさせて頂いております。これがその本です。かなりの方に買い取って頂いておりますが、今日も何部か持ってきていますので、できればお買い上げお願いしたいなということと、米田さんのご長男で米田勤草さんが今日見えておられますので、取りあえず皆さんにご紹介をしたいと思います。

米田勤草 ご紹介を頂きました米田栄作の長男の勤草でございます。今日は『リトルボーイ』の出版記念会に出席させて頂きまして、ほんとうにありがとうございました。

父の新しい詩集の出版にあたりましては、皆様にはずいぶんお世話になりました。この席をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございます。(一同・拍手)

長津功三良 それから大阪から見えました平原比呂子さん、汽車の都合でしょうかお帰りになられました。それからあと朗読とかをして頂く方は別として、今日はご遠方からずいぶん来て頂いております。山口県から山口県詩人講話会の会長さん陶山祐二さん。(拍手)お隣に藤元温子さん。(拍手)それから特にご紹介しておきたいのは、鈴木さんのご子息とお嬢様が今日受け付けのお手伝いに来て頂きました。鈴木光彰さんと春香さんです。(拍手)東京からわざわざこのためにお手伝いに来ていただきました。それから新潟から伊与部恭子さんが見えています。(拍手)あとは二次会に出て頂ける方だと思いますので、またその時個別にご紹介させていただきます。

それから米田栄作さんの詩集、文庫をご紹介させて頂きましたが、御庄博実さんが先ほど他の会から駆けつけてくれました。劣化ウランのシンポジウムがございまして、四日から六日まで本当は今日五日のこの時間もやっているのですが、この会のために間をあけて来て頂きました。後ほど最後のご挨拶を頂きます。それから御庄さんと東京の石川逸子さんと共編で『引き裂かれながら私たちは書いた』という韓国人被爆者の手記集がございまして、一八〇〇円税抜きで、ひとつお買い求めください。それから最初挨拶でありました「火皿」、これは予備がございまして持って帰って頂いて結構です。タダで差し上げますので、入口に先着順で積んであるのをどうぞカバンに入れていって読んでみて下さい。(笑)あとは申し訳ないのですがそれぞれコストがかかっていますので(有料で)お願いします。それから米田栄作さんの詩集は、私が申し込み書を持っていますので用紙をお渡しますもので、今日でなくともお振込み等いただければ事務局の私の方から皆さんにお送りします。これは一四七〇円なのですが、通信費とかそういうものを込めて一応一五〇〇円でご協力お願いいたします。もう時間の催促がございましたので、それでは最後のご挨拶の方へお回いたします。

松尾静明 では、閉会に際しまして御庄博実氏からご挨拶をお願いいたします。

戦後の日本詩壇の大きな潮流の一つであった「列島」の同人として全国的に活躍された方でございます。もちろん、今も詩を書いておられますけれど、行動する詩人という面においても、韓国の被爆者の医療問題、あるいはイラク戦争で使用された「劣化ウラン」の深刻な後遺症の問題などにも深く関わられておられます。世界的な視野の中で活動されている詩人でもあります。

御庄博実 どうも皆様、ご苦労さまです。今日は高畑烈さんのこの本の出版記念会ということで、私も浜田知章さん、石川逸子さんと一緒に日本語版の解説を少し書かせてもらいました。先ほど長津君が言いましたが、もの凄く忙しい数日で、三、四、五、六日というのは僕も分刻みのスケジュールなのですが、今回皆さんのところでどうしても顔を出したいということで、まだ劣化ウランの国際会議をやっている最中でしたけれども、エスケープさせてもらいました。

それで本日も国際会議で発言をしたのですが、その中で、国際会議の中で発言した中の一部を紹介したいと思います。

私の被爆体験とそれからその次は原爆をアメリカが隠した、隠した——どういうふう隠したかということ、それから、じゃあその劣化ウランや被害者が広島原爆の被害者とどういうふう違ったか。そしてそのことは何かということを話しました。その次に韓国人被爆者。広島では原爆投下時に三十

五万人の市民がいました。そのうち十万人が直爆死しました。朝鮮人は五万人住んでいて、そのうち三万人は直爆死。「三万人直爆」というのは、十万人のうちの三割ですよ。それで生き残った二万人の一万五千人がその年のうちに韓国へ、朝鮮半島の各地へ引き揚げて行きました。この『リトルボーイ』中にあった現在の韓国の陝川、慶尚南道へも多くが帰りました。ただ、帰って行った一万五千人、それで北朝鮮へ帰って行った八千人——その人たち被爆者は現在、韓国で三千五百人、北朝鮮で千八百人くらいでしょうか、それらの人は「国籍条項」を盾に援護法を完全に断られました。それからずっと病苦、差別に苦しい生活を送ってきました。僕は韓国人被爆者の援護に関わっていますが、その中で宗任復(ソ・インボク)さんはは十三歳で爆心から一・七キロの福島町で被爆します。炎の中を潜り抜けて、己斐小学校で負傷した兄さんと再会。重症で死の間際にあるお父さんを小学校の教室の中で、もう重傷者の中で介護を二日間します。探しに来たお母さんがやっと見つけた時には、既にお父さんは死んでいました。そのまま一家は韓国へ行ってしまう。帰国した彼女一家の辛苦は筆舌に尽くせません。その彼女はその後勉強しまして、小学校を卒業します。日本語が好きだったんですね。日本語を勉強した彼女は、見捨てられていた在韓被爆者のために、ガイド役となって被爆手帳、援護法の適応と力を尽くします。二〇〇三年から韓国でも、在韓被爆者でも被爆手帳を取れるようになりました。彼女は「被爆者はどこにいても被爆者」という実践をしていきました。ただ、被爆手帳というものは広島市役所で申請をしなきゃいけない。韓国人被爆者が申請に来ても、もう韓国で五十年六十年以上経ってしまって日本語で書けない。それで彼女はガイド役で、僕の所に連れて来て僕が診断書を書いたりしたのですが。

しかし彼女は六十年目に肺ガンになり、原爆症になった。それでその彼女が原爆認定申請をしました。原爆症の認定を受けると、十三万円くらい月々支払われます。それを唯一の願いとしましたが、日本政府は原爆の影響ではないといって厚生省から却下されました。彼女は今年の一月に亡くなりましたが、そして今現在も原爆訴訟というのが闘われています。それで昨日、全面勝訴！ これは大きなことです。

先ほど劣化ウランの話をしました、僕の劣化ウランの詩集があるのですが、その韓国人被爆者の詩集になっております。劣化ウランの詩を読んで終わりにします。短い詩です。「私の胸のふくらみに | 劣化ウラン・」というイラクの少女がガンになったことを書いた詩です。

わたしのふくらみはじめた心は花のよう  
わたしの髪に飾られたサフランの  
薄紫の匂いが好き  
わたしは小さな橋をわたり  
ムハマド先生の学校に行く

わたしの胸の  
やわらかいふくらみに  
いつの頃からか冷たい輝が入り  
ひびは日ごとに深くなり  
ひびは日ごとに固くなり  
やわらかなところが声をあげ

胸の芯に切り込まれた冷たい輝が  
わたしの心にとげを刺す  
わたしは朝 山羊の乳しぼりをし  
小さな橋をわたって学校へ行く  
おはよう わたしの友達 わたしの先生

日ごとに深くなり  
日ごとに冷たくなり  
日ごとに固くなる  
わたしの胸のいたみ  
ある日「がん」だといわれたの  
その言葉が何であるかを  
わたしは知らない  
わたしはいつか死ぬのだと

かあさんが泣く  
山羊のシロの乳が  
こんなにもおいしい朝なのに

——ありがとうございました。(一同盛大な拍手)

松尾静明 今日の出版記念会は、まとめることがむずかしいくらい沢山のことが詰め込まれた会でした。これからも詩を書いてゆく私たちの反省材料としても、新しい出発のための目を開かせていただいたものとしても、久しぶりに格調の高い出版記念会でした。出席者、そして関係者の皆さんに厚く御礼を申し上げます。それでは、これで高炯烈氏『長詩 リトルボーイ』の出版記念会第一部を終わらせて頂きます。ありがとうございました。(一同拍手)

## ◎第二部

**司会…長津功三良**

**朗読とスピーチ**

**安藤欣賢、柴田三吉、草野信子、井野口慧子、港敦子、港万尋、**

**真田かずこ、葛原りょう、御庄博実、佐川亜紀、北村均**

**閉会の言葉…鈴木比佐雄**

長津功三良 これから第二部を始めますが、その前に第一部の挨拶予定者であった中国新聞社特別論説委員であり、「広島花幻忌の会」会長の安藤欣賢さんが見えていますので、広島の代表としてご挨拶をいただきます。

安藤欣賢 実はここへ来る前に、あるアメリカの三十一歳の青年の広島に調査研究で来たその奨学金を贈る式がありまして、そこへ出なければならなかったものですから遅れました。その研究というのは何かと言いますと、アリゾナ博物館と靖国神社と広島原爆資料館の三箇所において、日本人とアメリカ人の戦争の記憶がどういふふう形成されたかを比較研究するという研究なんです。つまり、われわれが受けとめている戦争というものとアメリカ人の戦争という考え方とどう違うのか、そのへんを明らかにしたいと。それを三十一歳の青年が考えて、靖国をまわって今、広島に来たというところで。先日は花幻忌の会でイタリアの青年が原爆作家の大田洋子と話してくれましたし、どうもこのところ海外から何か力を頂いているなというふう感じております。今日はまた韓国からわざわざおいでいただきまして、ありがとうございます。実は詩集を頂きながら報道する人間の方にすぐ渡したものですから、まだ読む暇がなくて。ただパラパラッと見たところでは、先ほどもちょっとおっしゃっていました距離を超えて広島を見つめておられ、しかも日本人、朝鮮人の両方を見ながら詩を作っておられるという、その集中力といいますか、あるいは持続力といいますか、それは非常に感銘を受けるものがあると思ひまして、これからじっくり読ませていただきます。どうもありがとうございました。(一同拍手)

長津功三良 それでは、東京から柴田三吉さんが見えておりますので、簡単なスピーチを五分程度よろしくどうぞお願いします。自己紹介をよろしく願ひいたします。

柴田三吉 初めまして。柴田と申します。

まず、私がこの詩集の訳者である韓成禮さんと初めて会ったのは、狛江の韓国語同好会が主催した会で、十年くらい前だったように思います。その後、高さんが、同じ狛江の韓国語同好会の招きで日本に来られたときに、初めてお会いしたわけです。それが七年くらい前でしたか。まさか、その時の出会いがここまで続くとは思ひもありませんでした。それはたぶん、韓成禮さん、日本の本多寿さん、鈴木比佐雄さんたちの努力の中で、うまく関係が保たれて発展させられてきたからではないかと思ひます。やはり国を越えた友情とは、人の関係の中で育ってくるものだなと実感しました。私一人だったら、まったくそういうところには関わっていけなかったことだったので、ほんとうに感謝しております。

今回『長詩 リトルボーイ』の日本語版が出るということで、鈴木さんから書評を書いて欲しいと言われ、ゲラを読んで書き始めました。これだけの内容のあるものですから、簡単には書けないと思っ

てはいましたが、けれど書くうちにだんだん長くなってきて、最終的に二十七、八枚になってしまいました(笑)。半分くらいは作品の引用なのですが、やはり語ることの多い、語らなければいけないことの多い詩集だなと思いました。

書評の中で私は、この『リトルボーイ』の主題は三つあると書きました。一つは原子爆弾——核兵器の問題ですね。核兵器の文明論的な問題というのが、まず大きな問題としてあげられます。もう一つは、いわゆる在日朝鮮人の問題ですね。原爆投下に至るまでの道のりを、彼らの暮らしの内側から描いているということです。三つ目が原爆そのものの破壊力、恐怖を描く部分。そうした三つの柱があるかと思えます。

日本の文学の中でも核兵器の文明論的なもの、その破壊力、あるいはそこにいた人間たちの精神的な問題ということは多く書かれてきたわけで、私もこれまで、そういうものは沢山読んできました。けれども、この本でやはり特筆されなければいけないのは、広島にいた朝鮮人の人たちがどのようにして被爆の場に至ったか、という問題だと思います。それは日本人にとってもとても大切な問題です。また、そのことを、韓国あるいは北朝鮮の人たちの中にも、大切な問題として伝えていかなければというふうに思いました。ですから私はこの詩集の中で、被爆した朝鮮人の問題ということにいちばん感銘を覚えました。

それから、今度の詩集は一部のみで、これに続く二部はまだ書かれていないということです。高さんの構想では韓国に帰った被爆者のことを書きたいということです。ですから、高さんにさらに期待したいのはやはり、被爆者が故郷に帰ってどのように生きたのかということを書いていただきたいということです。それもまた韓国の人たちにとって大事な問題であり、同時に、日本人にとっても大事な問題であると思うからです。(拍手)

長津功三良 では草野信子さん、東京からわざわざ駆けつけていただきましてありがとうございます。

草野信子 初めまして。今、司会の方から「東京から」ということでしたが、愛知県名古屋から参りました草野と申します。初めての方が多いのですが、よろしく願います。

私は二年前まで中学校の教員をしていました。その時にですね、これはちょっと一度書いたことがあるのですが、十五歳の女子生徒から「先生は戦争の時に何歳だったの？」と訊かれたことがあるんですね。私は一九四九年の生まれなので、「え！ まだ私は生まれてなかったけれど、どうしてそんなこと訊くの？」って訊ね返しました。その時にその女の子が「原爆の話とか空襲の話とか本当に体験したことみたいに話をしてくれるので、すごく恐かったらうな、可哀相だったなと思って、そのとき先生は何歳だったのかな？ と思ってから訊いたの」と答えたんですね。私はその彼女の答えを聞いて、何かちょっと不意打ちをくらったような気がしたのです。私は国語の教員だったので、教科書で戦争をテーマにした詩とか小説を読んだ時に少しでも何か自分で伝えることができたらいという思いがあったので、本で読んだものとか、石川逸子さんの「広島・長崎を考える」などで読んだ被爆者の体験とかを授業の中で子供たちに話していたんですね。それで彼女はそれを指して私にそういう質問をしたと思うのです。

さっき不意打ちをくらったようだとおっしゃいましたが、その時の私の気持ちはすごく恥ずかしかったんですね。何か「体験をしたことのように話してくれるから」と言われた時に、なぜでしょうね、本当だったら「やったあ！」と思うのかも知れないのですが、何かほんとうに恥ずかしい気持ちが強かったんですね。もう教員を辞めて二年経ちますが、以来私は、なぜ恥ずかしかったんだろうということを、ずっと考え続けてきました。詩を書くときも、やはりなぜ恥ずかしかったんだろうと考えてきました。

今回、高さんの詩集『リトルボーイ』を読ませていただいて、ほんの少しだけというか一つだけ分かったことがあります。それはやはり自分の内面の問題といますか、他者のごく大きな体験を今度は自分の言葉で私が語る時に、その他者の体験の引き受け方のようなもの、自分の中の何か引き受け方の問題なのだということを、『リトルボーイ』を読むことで分かりました。

今までに四回広島に来ているのですが、この八月の五日と六日に来ることができたのは初めてなんです。高さんの『リトルボーイ』という詩集に導かれて、それから「COAL SACK」の鈴木さんのおかげで今日明日とこの土地に居ることができたということが大変幸せで、深い感謝を抱いています。

(一同拍手)

長津功三良 ありがとうございます。

それでは、まず乾杯しましょう。乾杯の音頭は遠来の客を代表して宮崎の本多寿さんをお願いしましょう。

本多寿 それでは、乾杯(一同乾杯、拍手)

長津功三良 それでは、これから井野口慧子さんの朗読を始めます。(拍手)

井野口慧子 私は、生まれたのは広島県の三次という県北で原爆は免れたんですけど、もう赤ん坊の時から原爆の落ちた所から一・三キロくらいの観音小学校の近辺で育っていました。あの辺りには在日の方が沢山いらして、クラスにも小学校六年間何人かずうっと一緒にいた。その周りには全部焼け野原の跡にバラック建てて建てていたんですけど、在日の彼女たちの家は川のほとり、ほんとうに「小屋」の中に住んでいました。それが子供ですから、どうしてだかよく分らなかったですね。でも、記憶の中に何回か訪れた彼女たちの家っていうのが印象に残って、もうその時はどうしてこういう所で過ごしているのかというのが分からなかった。それで中学から市内の公立じゃない所に行って、そのまま会うことができませんでした。でも、あとで色々なこと思い出すと、彼女たちのことがとても記憶の中であって……。

それで今回持ってきたのは『いのちの音』という絵本です。私は、二十五年間自宅で「明日香文庫」という文庫を開いて子供たちに絵本を読みにあちこちの保育所だとか小学校とかに行っているんですけど、この絵本の前にですね——皆さんも記憶の中にあると思うんですけど、二〇〇一年一月二十六日、新大久保の駅でイ・スヒョン(李秀賢)さんという二十六歳の韓国の男性が、関根さんという日本人のカメラマンと一緒に酔っ払いを助けようとして電車が来た時に飛び込んで三人とも亡くなった事件がありました。それは皆さん覚えていらっしゃると思うんですけど。それを聞いた時にもうすごく私は、何とこののでしょうか、先ほど高先生が言われた「ただ」、「クニヤン」と言われましたか、ただもう感動して、たぶん国とか、日本であるとか韓国であるとかもう一切関係なくて、人間の愛をいくら言葉で説いても行動が、いざという急な時にたぶんその人の持っている愛が表現されるんだなと思って、とても感動しました。その後その味戸ケイコという親友がちょうど「こんな絵本を出しました」と送ってくれました。そしたら、鈴木比佐雄さんが「COAL SACK」を送って下さって、その中にイ・スヒョンさんのことが書いてあって、ああこれは味戸さんに伝えなきゃと思ったのです。鈴木さんは四周忌の時に韓国の釜山まで招待され、追悼詩を朗読されたんですよ。これからまたこれが映画になるそうですが、そういう繋がりがあるって、今日はこの絵本をとにかく読ませてもらおうと思って味戸さんにも伝えたとこ、「今日ここに来たかった」と言うくらい彼女の思いはあるわけです。韓国語に訳されていますので、一緒にちょっと読んでいただこうと思います。だいたいこれがさっと読んで五分くらいなので十分くらいはかかるとは思いますけれども、ちょっと読ませていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

港敦子 ありがとうございます。(一同拍手)

高炯烈 (以下、徐錫姫氏による通訳)平和記念公園でこの詩が書いてある記念碑へ行って来まして、すごく胸が熱く、痛くなりました。「にんげんの」というところで、とても強く痛みを覚えました。どうもありがとうございました。(一同拍手)

長津功三良 どうもありがとうございました。

こちらが港さんとご一緒に来ていただいたご主人です。自己紹介をお願いします。

港敦子 画家です。港万尋(まひろ)と言います。(拍手)どんな絵を書いているかは、直接本人に訊いて下さい。(笑)

港万尋 初めまして。港と申します。東京から参りました。『リトルボーイ』という詩集を送っていただきまして、二度読んで非常に感銘を受けました。ぼくは今日のような詩人の集まりに出席したことがほとんどありません。詩を読むということもあまりないので、言葉の力、言葉を信ずる力というか、言葉で勝負するという、そういう気概を持った人たちがこんなに集まった場に立ち会えて非常に感動しております。ぼくは絵を描いて表現をしていますが、今までにも原爆についての絵を何度も描こうと思って結局描けなかった思いがあります。詩人は言葉で大きな経験や事件にアプローチしていく、いろいろなやり方があると思いますが、そういう経験や記録をどのようにして表現——この「表現」と言うとか何か違うような気もするのですが、ぼくも悲惨な事態、異常な経験をどうにか形にして何とか伝えていくという方法を探っているところです。この『リトルボーイ』という詩集に限らず、皆さん詩人の方々がそれぞれ自分の言葉で、事態を記録していく姿勢に非常に感銘を受けました。ありがとうございました。(一同拍手)

長津功三良 突然指名して申し訳ありませんでした。

続いて、京都から来てもらっています「トンビ」という個人詩誌を出していらっしゃる、「現代京都詩話会」の代表をやっておられます真田かずこさんです。(一同拍手)

真田かずこ 京都から参りました真田かずこと申します。よろしく願いいたします。

私はこの長詩を昨日初めてですけれども、一気に、驚きをもって読みました。この長詩は、これまでと全く違う視点から書かれた原爆詩でありまして、私は、原爆詩はあまり読んではいないのですけれども、全く違うということだけははっきりと分かりました。そして、考えさせられることが多かったんです。その中の一つ、人間の欲望から生まれたリトルボーイ、そのリトルボーイの立場からリトルボーイの嘆きを分かった詩人というのはこれまで誰もいなかったと思います。リトルボーイの身になって書いた詩は初めてだったと思います。この一つを取っても、高炯烈氏が大変な詩人であるということが分かりました。

ここに集まっていられる方々以外の日本の方々は、多くの人たちが自分たちの悲惨なことはいろいろ言いますが、韓国を含めたアジアの人たちに苦勞を与えた事実を知ろうとはしませんでした。私もその中の一人でした。この『リトルボーイ』によって、私は多くの多くの事実が鮮やかに浮かび上がったというふうに思えます。悲劇を繰り返さないためには、事実を知ることから始めなければならないと思います。高炯烈さんのお仕事、すばらしい仕事をなさったと思います。改めて私は個人的にお礼が言いたいくらいです。こうして日本語に訳されて発行されたことは、大変意義が大きい

ことだと思います。本日はこの詩集の発行記念日に呼んでいただきまして、ほんとうにありがとうございました。発行を心からお慶びいたします。本日はこの中から朗読をと思ひまして、昨日急いで全部読みました。ずいぶん時間がかかりましたけれども、この全部の中から自分の好きなものを選ばなければならないので、最後の「エピローグ」とそれから「草の葉」、この二つを朗読させていただきたいと思ひます。そしてその一番最後に、自分の短い詩も聴いてください。

#### エピローグ

静かな心の窓の外にこの世の中がある  
その世界の人間と自然、人間の作った文明が静かだ  
静かな心の窓の中から眺める

そこは目覚めた者たちの行く道ではなかった  
彼らは善良な人々であるにも拘らず、自ら愚かなことを犯す  
その世界のものは有限であり、何も存在しないし、空しい  
窓の中の静かな心は、窓の外の世界を管理して支配しようと思わない  
窓の外の世界のすべてのものは一つも欠けることなしにこの静かな窓の中の  
心の世界に入って来る  
しかし人々は信じない

その日の朝は、いつも静かな心の窓の外から眺められる  
その光景は人間たちが作った罪悪の地獄だ  
静かに目を閉じつつ人間を考える  
苦痛で美しい世界で人間たちが自然を破壊し汚染して  
生命を軽視して死を起こす  
欲望に囚われて、すべてのものを未来の場所に置こうとしない人間たち  
私たちは未来の悲劇を知りながら、その道を歩いていっている  
私は静かな心の窓の中から破壊される窓の外にこの世の終りを眺める

そこでは自然と人と世界が見えない

#### 草の葉

遠く海に草の葉一枚が流れている。  
あの草の葉の上に私たちを皆載せることができるか。  
善良なすべての命ある目は眺める。  
どうして私たちはこの海におぼれてしまったのか。  
葉脈が一つも壊れていない草の葉一枚だけ  
あの水平線近くに切なく流れている。  
あなたは私たちに近付こうとされないのか。  
陰しい黒い雲が海を越えて吹いて来る。

(一同拍手)

#### 空

真田かずこ

きつとあの日も  
空は高く夕焼けは美しかったに違いない  
誰ひとり見る者がいなくても

いや 最後の瞬きに  
美しい空をしまった人がいただろう

人はさまざまな場面で空を仰ぐ  
一瞬たりと同じ空はなく  
人はみな 自分だけの空を見ているのだ  
きっと あの日も

いや あの日  
空は炎に焼かれていたに違いない  
人は 涙さえも干からびた熱さの中で  
何が起ったのか理解できないまま  
黒い雨が降るのを見た  
あの日ばかりは目を閉じていたかった  
震えが止まらぬほど恐ろしかった  
情けなかった  
しかし 閉じることは許されなかった

八月の空は痛い  
果てしなく遠い青が  
あの日をしまっている  
夕焼けさえも  
ああ  
恐ろしくて

——ありがとうございました。(一同拍手)

長津功三良 真田さん、ありがとうございました。被爆しなくて広島でない方の原爆詩も、こういうふうなうたい方があるという一つの作品であったと思います。ありがとうございました。懲りないでまた広島に是非来て下さい。

真田かずこ はい、ありがとうございます。

長津功三良 (広島へ)来たから二つ三つ書けるでしょう。(笑)

では若手の、僕はまだ少年と思っているのですが葛原りょう君に。今、色んな所で書きまくっています。ちょっと現代詩中毒の傾向にあるので(笑)「おまえ、書き過ぎだよ」って言っているんだけど、非常に才能豊かな青年でございます。東京からはるばる、原爆の運動も兼ねてこの出版記念会に駆けつけてくれました。葛原りょう君を紹介します。(一同拍手)

葛原りょう 上野池之端から来ました葛原りょうと申します。広島は去年も来たのですが、去年は六十周年なんて言っても「記念」なんて言えません。ただ、原水爆禁止世界大会に出席したのです。去年は詩人会議として来ましたが、今年はある意味個人として来しました。ただお金がないものですかから地元のカンパ先を頭下げて回って、台東区からの原水禁代表団一人として来しました。

この『リトルボーイ』を読みまして、ほんとうに驚愕してしまいました。要するに擬人化された原爆、これがスタートで、こういう原爆の詩は今まで私は見たこともありませんでしたし、とうとうこういう時代に突入してきてしまったかというか、擬人化をして原爆が恰も人格を有して生まれたというのが、ほんとうに驚愕的な私の中で大きな事件でした。しかも叙事詩。日本ではなかなか叙事詩というものはないので、非常に新鮮でしたし、そしてイ・オクチャンとかハナというキャラクターが出てきますね、それがたんとんと物語っている、最後まで抑制されていてよりリアルに感じました。新幹線の中でも読んでいたのですけれども、最後の「草の葉」ですが、いわゆる草の葉という平和を象徴した中に人が乗れるのだろうか、これも痛切に胸を抉られて、私はこれは日本だけではなくてアメリカの人にも読んで貰いたいし、どんどん世界中に訳されていいものだと思っております。

今日は朗読で、私が一番好きな詩人は賢治とか中もなんですけど、伊東柱がその次に大好きでして、四、五年前にはじめてこれ『星うたう詩人』(三五館)を手にしたのですが、これは皆さんご承知の通りですが、日本人によって殺された青年詩人は二十七歳で……私と殆ど同年代で、その詩人の詩を朗読して、あとは私の詩を朗読します。

星かぞえる夜

伊東柱

季節が移ろう空は

いま秋たけなわです。

わたしは、何の愁いもなく

秋深い星々をすべてかぞえられそうです。

胸の内に ひとつ ふたつと刻まれる星を  
今すべてかぞえきれないのは  
すぐに朝がくるからで、  
明日の夜が残っているからで、  
まだわたしの青春が終っていないからです。

星ひとつに追憶と  
星ひとつに愛と  
星ひとつに寂しさと  
星ひとつに憧れと  
星ひとつに 詩と  
星ひとつに……母さん、お母さん、

お母さん、私は星ひとつに美しい言葉ひとつずつ呼びかけてみます。小学校の時、机を並べた子らの名と佩、鏡、玉という異国の少女たちの名前。すでにみどり児の母となった小母っ子たちの名前。貧しい隣人たちの名前。鳩、子犬、菟、ラバ、ノロ、フランスス・ジャム、ライナー・マリア・リルケ、そんな詩人の名を呼んでみます。彼らはあまりにも遠くにいます。星が遥か遠いように。

お母さん、  
そしてあなたは遠い北間島におられます。  
わたしはなにやら恋しくて、  
この夥しい星明りが降り注ぐ丘の上に、  
私の名前を書いてみて、  
土で覆ってしまいました。

夜を明かして鳴く虫は  
恥ずかしい名を悲しんでいるのです。

しかし冬が過ぎ  
私の星にも春が来れば  
墓の上に真っ青な芝草が萌え出るように  
わたしの名前が埋められた丘の上にも  
誇らしく草が生い茂るでしょう。

葛原りょう 尹東柱 | 私の大好きな詩人です。(一同拍手)この中で「恥ずかしい名前」というのは尹東柱の日本語名のことでした。

高炯烈 皆さんもよくご存知でしょうけれども、尹東柱は韓国では青年詩人として若い時に日本で亡くなった詩人です。韓国にパクチョンという詩人がいるのですが、韓国の文芸芸術委員会の支援を受けて、オーストラリアに行って一か月くらい創作活動をしました。日本では分かりませんが、韓国では若い詩人とか作家たちが海外へ行って学ぶように、創作するよという支援する所があるんですね。その人が韓国からオーストラリアへ行きまして、尹東柱氏の妹を探して会って来たのです。この妹は、ボランティアをしながら今生活をしているそうです。尹東柱という一人の詩人の親戚とか、親友とか、子供時代の友達とかを追跡してみると、色んな昔の逸話などがいっぱい出てくると思うのですが、その短い期間の逸話ですが、オーストラリアに行ったパクチョン氏が尹東柱の妹から訊いてきたんですね。私も中国のヨンピョンの尹東柱が生まれ育った家へ行って来ました。韓国の一番大変だった時期、八〇年代後半に政府の許可なしに行って来ました。韓国のムン・ニツカン牧師はご存知でしょうか？ 統一のためにあの時も政府の許可なしピョンヤンに行って金日成主席と会ったのですが、そのムン・ニツカン牧師が尹東柱と同級生なんですね。そのムン牧師も亡くなりまし

た。そのムン・ニツカン牧師の詩集を私が作りました。題名が『一つの空 二つの空』です。私の記憶では、最後の父のような大人(おとな)。最近ではインターネットの時代になりまして、この時代は情報時代と言われていろいろ変わってきたのですが、今はお父さんのようなお父さんとか、お兄さんのようなお兄さんとか、詩人のような詩人とか、当たり前のような方々があまり見られない時代です。パクチョンがオーストラリアに行って尹東柱氏の妹に会って、尹東柱氏の逸話というのが何かと言いますと、尹東柱氏は、今ではヨンソナ大学と言いますが、昔は名前が違うのですが、そこで勉強している時に……。

長津功三良 ……あの、お話ししたいのは分かるのですが、葛原氏の朗読がまだなので悪いけど……。

葛原りょう いや、いいですいいです。

鈴木比佐雄 でも、今の話は聞きたいですね。

高炯烈 あなたが尹東柱の話をしたので、ちょっと言いたかったのです。この青年が尹東柱のファンだというので、言ってあげたかったのですよ。この話は全然ほかの人も知らない話ですから。

本多寿 聞かせてください。

高炯烈 昔、尹東柱はよく隠れたりすることを楽しんでやっていたのですけれども、抵抗詩人としての尹東柱ではなくて、ふざけたり、天真爛漫な詩人でしたよ、というその話をしたかったんですよ。(笑)

長津功三良 ありがとうございます。ごめんなさい、高さんに(韓国語で)謝っておいてください。

葛原りょう じゃあ時間がないので一篇だけ。今、時代が便利でパソコンでこういう手作りの詩が作れるんですよ。これ、自分で折って夜に淋しく作っているんですけど。これは去年広島に来てからできた反戦詩集なので、その中から。これは森井香井さんという詩人も英訳してくれて嬉しかったんですが。

流れ

葛原りょう

世界は

またたく間に変わり

人々は、動顛し、驚いて、ひとつに、固まり

弾丸となり ウランとなり

折り重なり あるいは流れ

流れの跡は 火星のような焦土——

右向け右 と言えばそのようになり

左向け左 と言えばそのようになり

果てしない崖 盲目のレミングスたち

過去を 忘れては 飛び降りる——

こんな調子は誰だってもう、沢山なのに

地球を削る軍靴の

足音がする

耳を澄ませてごらん

ほら

わたしたちはもう

つぎの戦場に

立っている

——ありがとうございました。(一同拍手)

長津功三良 ごめんなさい。高さんにせっかいい話をしてもらいながら話の腰を折って大変申し訳ない。進行とか諸々ありまして……。

それでは、先ほど時間の都合で御庄博実さんの劣化ウラン弾の話をも中断させてしまいましたので、続きを少し……あっ、三十分延長していいそうですから、もう一回彼の話を聞けます。では御庄さん、締めくくりのつもりで先ほどの続きをしてください。通訳をお願いします。

御庄博実 本名は丸屋と言います。広島共立病院の名誉院長です。ペンネームは御庄博実で、詩を書いております。実はもう八十一歳なものですから、座らせていただきます。(笑)

先ほど紹介しましたけれども、この『引き裂かれながら私たちは書いた』という在韓被爆者の自分

史、石川逸子さんと一緒に出したんですけど、ほんとうに韓国人被爆者というのは二重三重の、何と言いますか被害と差別と苦難の道歩んで、日本からも見捨てられ、「パンチョッパリ」と韓国へ帰って差別され——病気に苦しみながら。それでこの中の十一人ですが、半数はもう亡くなっていますが、自分の死と対面しながら自分史を書いたんですね。発行は実は明日、二〇〇六年八月六日ということになっています。できれば読んでいただきたい。ご希望の方には僕は署名をいたします。

それから、先ほど『リトルボーイ』の詩を真田かずこさんが読まれましたが、高さんが長編詩を書かれました。高さんは被爆者ではありませんね。それで長津君も実は半被爆者と言っているんですよ。真田さんは自分でさっきのような原爆詩を書いておられる。僕は現代詩というのは想像力(イマジネーション)と批判精神だと思っています。ですから、被爆してなくても被爆していても、被爆者としての被爆詩、原爆詩というのは僕は書けない。そして真田さんのさっきの詩は感動的でした。とてもいい詩でした。高さんの『リトルボーイ』も実は、やはりみんなの魂を揺さぶる詩だと思います。高さんは自分のイマジネーションで書いている。イマジネーションと批判精神で書いている。

実は、この「ぼくは小さな灰になって」というのは、劣化ウランの告発をした詩です。イラクのバグダッド大学の医学部、そしてバスラ大学の医学部から広島に来られたお医者さんが、僕に話したいと。「原爆を受けて被爆者を診療している医者と話したい」というので会って話をした時に、初めて僕は劣化ウランというのはこんなにひどいものだと、原爆以上に人間を蝕むものだというのを知りました。それで、そのバグダッド大学とバスラ大学の教授は、まだアメリカとイギリスの連合軍がイラクに攻め込む前、前の年の十二月に日本に来られた。広島の医者なら、広島の人なら分かってくれるだろうと。だから、もうイラクでは白血病の患者が、子供たちが、もう大学の病院の病室も一杯なのだと。もうこれ以上病人や怪我人を増やさないで欲しい。アメリカ、イギリスの侵攻をやめさせて欲しい、止めて欲しいと訴えられたのです。それで広島では人文字を書いたりなんかしてやりましたが、やはり翌年の三月二十日にアメリカはイラク侵攻しました。それで僕は、その直前にバグダッドで劣化ウランのシンポジウムに出ました。劣化ウランというものは、やはり初めてその時日本で危険性が指摘されたのですが、それでも侵攻しました。そのバグダッドでやられたシンポジウムの報告集を二冊買ったんです。アラビア語と英語で書いてありました。(笑)アラビア語の方は全然読めません。英語の方はまあ何とか分からなくはない。それを見ると、広島の白血病患者の症状、ガンが発症すると全く違うんですね、劣化ウラン。それで一九九一年にはブッシュの親父さんが侵攻し始めた。それで二〇〇二年にそのバグダッド大学へ留学して十一年間、白血病が出、そしてガンが肺ガン、乳ガン——ずうっと五年くらいガンが出始めたんです。そんな物事ないはずだと思って、放射研(放射線影響研究所)のABCCの『原爆放射線の人体影響』という厚い五百頁くらいあるものを調べてみたのです。日本では、広島では、白血病はだいたい八年、九年目からずうっと下がってくるんですね、発症は。イラクではずうっと上がり続ける。そして一番びっくりしたのがね、肺ガンと乳ガンが四年目くらいに発症する。広島では二十年後ですよ、原爆は。それで劣化ウランというのは、呼吸器に吸い込んだ劣化ウランの微粒子が内部を被曝するんですね。だから僕はイラクに行ったことはありませんからね。アフガンにも行ったことはありません。ただ僕も僕のやはりイマジネーションと批判精神でこの詩を書きました。石川逸子さんがご一緒しようということで、一冊の本になりました。

先ほど僕は「私の胸のふくらみに」というイラクの十二歳の少女が乳ガンになった詩を読みました。今度はアフガンの子どもの詩の一つ読んで終わりにしたいと思います。アフガンの9・11テロの報復でアメリカはすぐアフガンに攻め込みました。そしてカブールや色んな所で、様々な所で、今でも非常に不安定な生活状況です。「マリナ」という少女のことです。

マリナ

御庄博実

お父さんは牢獄で足をなくした

お母さんは病気の

家族は七人

わたしと弟と  
一日の物乞いが全てなの  
笑顔を忘れたラビン  
カプールで五万人といわれるストリートチルドレン  
マリナ  
女の子であることが見つかって  
無理やりブルカをかぶせられ  
明日から働けなくなった  
お母さんが泣くだろう  
妹たちも食べるものがなくなった  
わたしはブルカを脱いで 逃げる  
わたしもじき売られる  
わたしの迷路  
わたしはまた男の子になり  
焼け跡を片付け レンガを運び  
一日の糧を得る  
明日もまた街に出る  
バルサンとジョーナーと  
物乞いをする  
運が良ければレンガ運びにありつける  
幾度目かの扮装は見つけられ  
道で叩かれ  
鉄格子に入れられたマリナ  
お母さんが泣いているだろう  
妹たちは今日  
一切れのナンにありついているか  
鉄格子の中のわたしの涙  
マリナ と呼んでいるお母さん  
マリナ と

(一同拍手)

長津功三良 ありがとうございます。御庄博実さんは、広島でも意外と古い経歴はご存知ない方が多かったんですが、昭和二十六年ですか最初に米軍の政令違反で逮捕されています。「飛行機虫」という反戦詩を書いて、これは当時ソ連でも有名になったんですが、日本人の詩人でそれほど反戦詩とも思えないような状況の詩を書いて逮捕されて拘留されたのは、彼が初めてだろうと思います。(笑)僕は「広島の財産だ」と言っているんですが……。その当時肺結核して療養しているその療養所を、警官の四、五十人で囲まれたという人です。結局、無罪放免ではありませんが、立証できないということで仕方なく警察が降りたという事実でございます。それからあと代々木病院へ行っているいろんな高名な人の治療をして、今に至っているわけです。

では、佐川さんに無理やりですが、やはり広島の人でこのあいだ全作品集を出したばかりの栗原貞子さん。彼女の場合には「生ましめんかな」という詩が非常に有名なのですが、「生ましめんかな」に対してやっぱり広島が反省しなきゃいけないという、「ヒロシマ」と言った時には広島も加害者だよ、ということを書いた「ヒロシマというとき」という非常に有名な作品があるんです。晩年栗原さんは、どこかで朗読をする時は必ず「生ましめんかな」とこの「ヒロシマというとき」とを反省を込めて朗読をされたようです。その作品の韓国語の訳で読んでいただけるそうですから、是非ひとつ無理やりですけど、佐川亜紀さんをお願いいたします。

佐川亜紀 たいした声ではないので発音も悪いので申し訳ないのですが、ただ、これは私が神奈川大学の尹健次先生が主宰する「東アジア 詩と文学のタベ」という会に参加していて、在日詩人の康明淑さんがいらっやって谷川俊太郎さんの訳詩をホームページで発表している方で、栗原さんの詩をちょっと訳して頂けませんか、ということをお願いしたのです。ただ私、訳して頂いて考えさせられたのは、訳すことによって栗原さんの詩を新しい視点から読むことができたことです。と言うのは、「〈ヒロシマ〉というとき／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくたえてくれるだろうか」というのを訳して頂いたときに「やさしく」というのが、日本ではすごく広い意味なのですが、韓国語では睦まじくやさしいのか、穏やかにやさしいのか、日本語の「やさしい」に対応する言葉が、韓国語では色々あるわけです。となると、逆に日本人に問いかけていて、この「やさしく」と言うのが、いったい日本人の平和のイメージとして、どういうやさしさなのかな、というのをつくづく感じまして、これは訳者によって色々な訳があると思うのですが、例えば、韓国の人が日本の「やさしく」というのを、どうふうふうに受け取られるかというのが、私としても、もう一回「ヒロシマというとき」を考えさせられたのでした。それでちょっと、私あんまり読んでいないので申し訳ないのですが……。

(以下韓国語で朗読。)

ヒロシマ・ラゴ ハル テミョン

クリハラサダコ

(一同拍手)

——次は日本語で読みます。

〈ヒロシマ〉というとき  
〈ああ ヒロシマ〉と  
やさしくこたえてくれるだろうか  
〈ヒロシマ〉といえば〈パール・ハーバー〉  
〈ヒロシマ〉といえば〈南京虐殺〉  
〈ヒロシマ〉といえば 女や子供を  
壕のなかにとじこめ  
ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑  
〈ヒロシマ〉といえば  
血と炎のこだまが 返って来るのだ

〈ヒロシマ〉といえば  
〈ああ ヒロシマ〉とやさしくは  
返ってこない  
アジアの国々の死者たちや無告の民が  
いっせいに犯されたものの怒りを  
噴き出すのだ  
〈ヒロシマ〉といえば  
〈ああ ヒロシマ〉と  
やさしくかえってくるためには  
捨てた筈の武器を ほんとうに  
捨てねばならない  
異国の基地を撤去せねばならない  
その日までヒロシマは  
残酷と不信のいがい都市だ  
私たちは潜在する放射能に  
灼れるパリアだ

〈ヒロシマ〉といえば  
〈ああヒロシマ〉と  
やさしいこたえがかえって来るためには  
わたしたちは  
わたしたちの汚れた手を  
きよめねばならない

——今、栗原さんが亡くなられて、メッセージをもう一回受け取った時に、やさしく答えてくれるということは、私たちが描いてきた日本のイメージが六十一年経ったわけですけども、日本がどういうやさしいイメージを抱いて来たのかな、というのをもう一回アジアの言葉に訳したときに考えてみたいです。他の外国語に訳した時にどう「やさしさ」なのか。小泉首相がブッシュ大統領の前でエルヴィスのラブミーテンダーを歌いましたけど(笑)、そのテンダーという言葉を読する時に、日本人はどういう訳を逆に書いていけるか。詩人が想像力でこれから日本の未来をイメージしていく時にすごく重要な問いかけになると思っています、すみません、大変拙かったですけど読ませていただきました。

長津功三良 韓国語での朗読というのは、高炯烈さんに大変良い贈り物だったと思うんですね。

あと、先ほど無理やりお時間の延長をお願いしましたので、高氏にお話を一〇分くらい、あとの五分を鈴木比佐雄にお願いしたいと思います。

李美子 先生は、テーブルを越えてそれぞれ個人個人との話がしたいそうですから。

長津功三良 はい、分かりました。それではあと何人かお話をお願いしようか？

安藤欣賢 ちょっと一ついいですか？ 今の栗原さんのこと。「ヒロシマというとき」は、実はあの詩が生まれる前に、栗原貞子はYWCAの人との話の中で、インドネシアで日本軍に夫が捕まって拷問を受けた華僑系、中国人系の婦人の話を聞いているのです。それは何かといいますと、拷問を受けて苦しいものですから「水を下さい」と言うと、憲兵がコップに水を入れたものを目の前に持って来てポット捨ててですね。水を床にぶちまけた。それでそういう話をした後に、「被爆者も水を下さいと言ったんですね？」という言葉が非常に栗原さんにとってきつく聞こえたのです。そこから初めてというか、ある意味「日本軍の加害性」について「被爆の被害の意識」というものを合体して考えなくてはならないと感じて、結局「ヒロシマというとき」というような詩が生まれたということをちょっと紹介しておきます。(一同拍手)

長津功三良 ではわずかな時間ですけど、広島県詩人協会の事務局長をやってもらっております詩人の北村均君にちょっとひとことお願いします。

北村均 今日は仕事だったので出られるかどうか分かりませんでしたけど、たまたま昼過ぎに終わってトラックで同僚に送ってもらって、ここに出席しました。それで本多さん、顔を見た時に何年前に会ったんだけど……。

本多寿 俺、分からなかった。(笑)

北村均 僕も分からなかったんですよ。だから挨拶しそびれて。

その本多さんと初めて会ったのは何年前だったんですけど、井野口慧子さんと私と川野勝重さんの三人でお会して、その時に本多さんが言われた言葉が「私は広島に来るのが非常に怖かった」。それで、僕はそれを聞いた時に「あ、そういう人たちがいる間は広島は大丈夫なんですよ」と言ったことは覚えているんですよ。あれから何年経ってしまったか忘れてしまいましたが、今、広島に来るのが怖いという思いの人が、どの位いるだろうかと心がいささか寒くなる思っています。

本多さんの件はこの位で、高さんへの質問が少しありますが、時間が無いということなので、一番先に掛かった点だけ一つおうかがいします。それは、名前は今覚えていませんが、ふたりの詩人の業績について話された時、一人の詩人が最終的に「勝った」と言われたことです。日本でも人生の成功

について「勝組、負組」と分ける表現がよく使われておりますが、詩の仕事について「勝ち、負け」というのは、どうも適切ではないように思われます。実際に高さんがこの言葉が使われたのか、ひよっとすると通訳の方がたまたまそう訳されたのか、その辺がちょっと分からないのでお聞きします。

井野口慧子 あっ、それは私も気に掛けていました。たしかにそのように言われたかも知れない。

高炯烈 そうですね。いやたしかに「勝った」と言ったのは適切ではなかったかも知れません。おそらく「そうした成果を得ることが出来た」といった意味で話したのすが。

北村均 そうですか、よく分かりました。どうもありがとうございました。

鈴木比佐雄 本日は長時間、最後までお付き合いいただき感謝しております。私は韓国の優れた詩人と広島の人たちを結びつけ、出会わせたいという長年の思いがようやく実現できて、大変嬉しいです。今日の会を記録してまた反復していきたいとも願っております。本日は、本当にありがとうございました。(一同拍手) (終了)